美澤へ手紙を出してしまふと、新子は美澤との氣まづい會合を早く片づけたいと、返事が來るのが、氣がかりだつた。

だが、返事は、その翌日も翌々日も來なかつた。

三日目に、新子が三時頃に、お店へ行つて、お掃除をして、開店の準備をしてゐると、時計が四時を打つたばかりに、フラリとはひつて來たお客があつた。逆光線で初めはフリのお客かと思つてゐると、それが思ひがけなく美澤であつた。

新子は、瞬間、ドギマギしたけれど、直ぐ他意のない微笑をかれの眼に送つた。

しかし、美澤は眉の間に、筋を作つて、少しも笑はなかつた。

ソファと椅子に、焦茶色の卓子をはさんで、二人の間にしばらくの間、沈默がかぶさつた。

やつと、新子は、

「どつか、外へ參りませうか。」

と、云つたが、美澤は首をふるばかり……。

新子は、わびしい氣がしながらも、

「美和子のことなのでございますが……」

と、話を切り出した。

美澤は、味氣なささうな眼を、ボンヤリ新子に向けた。新子は、その眼をなるべく意識しないやうに、

「貴君のお母様からも、お話がありましたし……美和子も、貴君と結婚したいやうに申して居りましたんですけれど、……この頃美和子は、まるで貴君とも、全然お目にかゝつてゐないやうだし、一體どうしたんでございませうか……」

美澤は、無言である。つねさへ、あまり口數をきかない人が、何か一杯抗議を盛つた沈默で、向ひ合はれると、新子は勢ひ、自分一人で喋べりつゞける外はなかつた。

「それに、この頃の美和子は、まるで結婚前の娘とは思はれないやうな事ばかり致して居りますの。頼みも致しませんのに、この店へ手傳ひに參りまして、毎晩遲くまで、お客さまの相手をして、醉つぱらつたりなんか致しますの……。貴方とのお話があるのに、何ですか、することなすこと、私には腑に落ちないことばかりですの……。だから、一度貴君にお目にかゝつて、貴君御自身の美和子に對するほんとうの氣持を、お訊きしたかつたんですの。」

しかし、美澤はまだ無言であつた。

「私も、いろ〳〵お話しいたしますわ。貴君のお氣持も、うかゞつてもいゝんですわ。……とにかく、改めて美和子の姉として、貴君にお願ひしたいと思ひますの。」

美澤は、やつと苦笑して、

「お互に、あさましい話をするやうになりましたね。」

と、云つた。

新子も共に、やゝ笑つた。

「だつて、仕方がありませんわ。」

（貴君も、私も同じやうに失策をしたんですもの。）

と、後の方は心の中で云つた。

六

二人とも、やゝ核心にふれた物云ひをしたので、思ひがけなく、心の角が除れ、新子は急に話し易くなつた。

「美和子ね。まるで、とり止めがなくて、手こずつてゐるんですよ。貴君が、結婚して下さるお

つもりなら、貴君に監督をお願ひしようかと思つて……。私の云ふことなんか、てんで聽かないんですもの……」

新子は、以前の親しみが、半分以上、甦つたやうな物云ひが出來た。

「いや、美和子さんなんて、誰の手にだつて負へるもんですか。あの人の氣持なんか、僕になんか分りませんよ、千變萬化ですよ、僕なんかいゝ加減、引つぱり廻されてゐたんですよ。……」

さう云つて、美澤は、改めて眉をひそめた。

さう云はれて見れば、溫和しく純眞な美澤に、美和子を操る力など、最初から無かつたことに、今更のやうに氣がついて、新子は更に、味氣ない氣になつた。

「それよりも……」

美澤は、ぢつと新子の眼を見つめながら、

「僕は、貴女のお氣持が聽きたいんですよ。貴女は、何うして輕井澤から、歸つて來ながら、直ぐに僕の處へ、手紙なり姿なり見せてくれなかつたんですか。」

と詰つて來た。

「その時、直ぐにも貴女に會へたら、こんな妙ちきりんな三角關係なんか、出來なかつたんです

よ。僕も、いけなかつたですけれど、新子さん！　僕は、貴女に洗ひざらひ打ち明けて、美和子さんとの話は、打ち切りたいと思つてやつて來たんですよ。」

新子が、何か物云ふ隙もなく、後をつゞけた。

「美和子さんは、貴女とはまるで違ふ。明るくて、無頓著で、超人的な魅力を持つてゐますよ。それだけに、誘惑されたり、征服慾を誘はれたりするものゝ、心の底からの愛情の動きなんかちつとも感じられませんね。あの人は、心を持たない女ですよ。結婚するには、感覺的な刺戟や、性的魅力の有無などと云ふことよりも、心の愛情が一番大切なんぢやありませんか。あの人は、たゞあそびのお友達ですよ。ほんとに、心を委せて置けるやうな・・・・」

「でも・・・・貴女のお母様のお話では・・・・」

「母の事なんか云はないで下さい。美和ちやんは、あんな年寄なんか、掌中に丸め込むのは、お手のものぢやありませんか。それも、僕をほんとうに愛してゐるからぢやなく、たゞ興味本位の一時のお芝居なんですよ・・・だから、もう飽きてしまつて、僕の處へなんか寄りつかないぢやありませんか。」

藪を、突ついて蛇！　美和子の煩はしさを突き去らうとして、思ひがけなく、美澤との煩惱を

つゝき出した形である。

七

美澤も、なほ言葉をつゞけた。平生、口數の少いだけに、かうなるとその切々とした述懷に、力が籠つて來るのである。

「貴女が輕井澤へ行かれた後、不意に美和ちやんに、訪ねて來られて、その晩か次ぎの晩に、接吻をしてしまつて失敗たと思つたんです。何の深い考へもなく、全く突發的な出來事だつたんです・・・・しかし、僕は、貴女にすまないと思ひました。」

さう云はれると、新子は自分にアテこすられてゐるやうで、身が竦む思ひがした。しかし、

（私も、それと同じ事があつたんです。全く突然で、深い考へもなく・・・・）

とは、告白出來なかつた。

美澤は、新子の表情が、易つたのを自分に對する非難だと思つたらしく、

「だから、僕は貴女が、お歸りになるのを待つて謝まらう、いさぎよく貴女の制裁を受けようと思つてゐたのですが、貴女は美和ちやんから、どう云ふ事を聽かれたのかも知れないが、今日ま

で一切何も云つてくれないでせう。勝手なうぬぼれかも知れないが、口に出して云はなくつても、お互に愛人同士だと思つてゐただけに、貴女の無言は、貴女の氣持を見失つたやうに思はれ、ボンヤリしてしまつたんです。それに、僕は自分で犯した罪があるだけに、自分の方からは圖々しく、貴女の方へ働きかけることが出來なかつたのです。その内に、貴女と前川さんとが：：あの方、前川さんでせう：：帝劇から出るところを見てしまつたんです。失戀とは、こんなものかなあと思ふほど、みじめな氣持になつてしまつたんです。美和ちやんとの事なんか、あの人から渡される芝居の役柄のやうな立場を、苛々しながら、勤めてゐただけですよ。」

言葉づかひは改まつてゐたが、心のまゝを素直に打ちあけられて、新子は悲しかつた。

輕井澤から、歸つて來て、すぐにも美澤の所へ行かれなかつたのは、自分にも美澤と同じあやまちがあつたからである。

美澤が苦しんでゐた位は、自分も苦しんでゐたのだ。と、急に泣ける位、悲しくなつて來たのをこらへて、

「ごめんなさいまし：：」

と、云つた。

「貴女は何を謝るんですか。」

美澤は、駭ろかされたらしかつた。美澤は、あやまつてはもらひたくなかつた。謝つてもらふかはりに、許してもらひたかつた。

（さう。美和子のことなんか、どうせあんないたづらつ兒相手の事ですから、何とも思つてゐませんわ。）

と、云つてもらひたかつた。

しかし、新子の心に、前川の落してゐる翳影は、かなり大きかつた。新子は、自分の心持を打ちあけ、お互に許し合つて、三月前の二人に歸るべく、あまりに複雜した氣持になつてしまつてゐた。

八

「貴女が謝まる事はない。僕は、ちつとも貴女に謝まつて貰はうと思つて來たんぢやない：：惡いのは、僕だもの。失策をした僕としては、勝手な云ひ草だけれど、僕に誤ちがあるにしろ、貴女が一度も僕を詰らずに、冷然としてゐるんで、僕は何だか貴女が恨めしくなつてしまつたん

だ。貴女とは、お互に隨分好きだなんて、思つてゐた事が、全然僕の獨り合點だつたんだと思つた。すると、何から何まで厭になつてしまつて・・・」

さう云ひながらも、美澤は自分の云ひたい氣持が、ハツキリ摑めなくなつたやうに・・・自分に對しても、新子に對しても、もの足りなさや、苛立たしさが、湧き返つて來たやうに、綺麗な眉や眸を、高い鼻の上へ、きゆつと寄せてしまつた。

だが、美澤が何を求めてゐるか、何のために苛立たしくなつてゐるかは、新子にはよく分つてゐた。

つまり、自分の愛である。どんな形式でもいゝから變らざる愛を示す一つの言葉である。

それが、新子に分つてゐながら新子は、素直にそれを與へることが出來なかつた。

美和子のために、新子は美澤をあきらめてしまつた筈であつた。美和子と醜い爭ひをするのが嫌で、美澤を美和子に呉れてやつたつもりでゐた。しかし、もしそれならば、美澤が美和子との關係を告白し、それが感覺的な一時の誤ちであつたことを謝つてゐる以上、・・・また美和子が、美澤に對して、ケロリとしてしまつてゐる以上、美澤を許して、以前のやうな愛人關係に――いな雨降つて地堅まるやうに、前よりももつと具體的な愛の誓ひを交してもいゝ筈ではないか。

新子自身さへ、それがさうなるべき筈であると思ひながらも、氣持はその方へ、ちつとも動いて行かなかつた。

「貴方のお氣持よく分つてゐますの。でも、私輕井澤から歸ると、いきなり美和子から聞かされてしまつたんでせう。その上お母さまでいらしつたんでせう。それですつかりもう決心しましたの・・・それに、私も母を抱へて居りますし、あんな出鱈目な妹を持つてゐますし、姉は家の事なんか、かまつてくれませんし・・・結局、獨立して何か商賣がしたくなつてしまつて・・・」

「ぢや、つまり貴女は前川さんに、この店を出して貰つたんですか・・・」

笞刑を受けてゐる囚人のやうな聲で、切れ〴〵に云ふ美澤の言葉には、言外の意味も含まれてゐて新子はギヨツとした。

九

前川に店を出して貰つたかと云ふ露骨な問は、新子の其處だけは觸つて貰ひたくないと思つてゐる心の點に、觸れたので、新子は咄嗟に答へられず、だまつて卓子の上に目を落した。

さうした態度は、つまりその質問を肯定してゐることなので、美澤はすつかり絶望的になつて

しまつて・・・・

「貴女のお手紙にある、變つたと云ふのは、どう云ふ意味ですか・・・・」

と、つい皮肉な怨言を云つてしまつた。

「それは・・・・」

何か適當な辯解をしようと思つたが、結局前川との微妙な關係はたうてい美澤には理解しては、貰へさうもないので、

「つまりバーなんかに出るやうな事になつた事を云つたのですけれども、私別に前川さんに、へンな意味でお世話になんかなつてゐませんわ。」

と、答へながらも、新子の聲は心持ふるへてゐた。

美澤は、すぐもろく折れて、

「いや、こんな質問は、僕としては餘計な事でした・・・大變失禮しました。しかし、貴女がもう、以前のお心持に還つて下されないことだけは、僕に分つたやうな氣がします・・・さう云ふ風に考へてもいゝんでせうね。」

これは、美澤としては、最後の質問だつた。

しかし、新子の唇は、かすかに動いただけで、言葉は出なかつた。

美澤は、新子の心の奥が、のぞかれたやうな氣がして、索然としてしまつた。

こんなに緊張した空氣の中へ、何時戸外からはひつて來たのか、美和子が、

「あら、眞暗ね！」

と、扉口で、電燈のスヰツチを押さうとしてゐる聲がして、新子はハツとなつて、にじみ出てゐた涙をかくした

いつか夕闇が迫つて、部屋の中は物の文色も分らないほど暗くなつてゐるのを、二人とも氣がつかなかつたのである。

電燈の光は、ボツクスにさし向ひになつてゐる二人の姿を、美和子の前に、ありありと照し出した。

「まあ！　駭ろいた美澤さんとお姉さまなの！　まだお客さま、誰も來ないの。」

「・・・・」

新子は、妹の言葉など、耳にはひらなかつた。

美和子とてもさすがに、その場の空氣に馴染みがたいものを感じて、少々鼻じろんだやうな表

情であつたが、すぐ美澤の脇へ腰を降して涙の跡の歴々と見える、姉の顔を見やりながら、

「二人で美和子の惡口を云つてゐたの？」

と、二人の氣持を救ひ、併せて闖入して來た自分の氣持も救はうと云ふ、よく考へた、さりげない言葉であつた。

歩み寄る心

一

しかし、姉も美澤も、そんな事は緣が遠いと云ふやうに、笑ひもしなければ、美和子を見ようともしなかつた。

美和子も、取りつく島がなく、マツチを卓子の上へ、カタカタと、弄びながら、急に大人つぽい片頬笑を浮べると、

「美澤さん。此間中から、姉さんと三人で、話をしたいつて云つてらしつたんだから、丁度いゝわ。ねえ。いゝ機會だわ。あたし痩我慢つてことが、一番きらひだわ、あたし、潔く退却するわ。お姉様達二人で、仲直りなさいよ。」

年も行かぬ、打見には子供らしい美和子だつたが、その笑ひ方と云ひ、言葉と云ひ、涙ぐんで、ゴタ〳〵云つてゐる美澤や姉を憫笑し、しら〴〵しく眺めてゐると云ふやうな、底知れない大膽さが含まれてゐた。

「美澤さんも、お姉さまが思ひ切れないし、お姉様だつて、痩我慢で超然として、いらつしやるなんて、可笑しいわ。美和子如き、問題ぢやないわ。バツが惡かつたり、つまらない意地を張つてるなら、美和子が握手さしたげる……」

と、顎にかゝつてゐる美澤の手を、いきなり左の手で摑みかゝるのを、美澤はかるくふり拂ふと、それをキツカケのやうに、立上つてしまつた。

美澤の態度が、唐突だつたので、新子もハツとなつて立ち上つた。

「さよなら、美和子さん、僕は君とはもう會はないよ。いゝだらう。それから、新子さん、貴女とも、もう會ふ必要はありませんね。」

美澤の顏は、能面のやうに、無表情であつた。

「いゝわ。結構よ。」

美和子は、亢然と、それに應へると一散に奥へ走つて行つた。

新子は、引き止める口實もなく、何もいふこともないのに、このまゝ別れるのが、何となく悲しく、別れるにしても、お互に心をいたはりながら別れたいと思ふと、今五分でも十分でも、話がしたく、ズン〳〵扉口の方へ歩き去る美澤の後を追うて、横飛びに戸外へ飛び出すと、男の足早く、もう五六間も歩き去つてゐた。

「美澤さん！　美澤さん！」

四邊を氣がねしながら、呼んで見たが、美澤は痩せた肩を、聳やかしながら、後もふり返らず歩きつゞけた。

「一寸！　一寸！」

新子も、小走りに後を追ひかけたが、美澤はそこの四つ角へ出ると、駐車場の圓タクの一つに、相場も定めず、

「まあ！」

と、駭く新子を尻目に、飛び乘つてしまつた。

二

美和子は、姉と美澤とが、前後して戸外へ飛び出してしまふと、美澤とこのまゝ別れてしまふことが、何となく劇的で、却つて胸の轟くやうな亢奮を覺えて、彼女らしく激しい音樂が聽きたくなつた。

彼女は、エレクトロラの蓋を拂つて、コンチタ・スペルビアのスペイン歌謠曲をかけると、自分も小聲で共に和しながら、酒場の中を、一二度行きつもどりつした。

その時、扉の開く音がした。美和子は、姉でなかつたら、女給のどちらかだらうと思つて振向きもしなかつた。

「今晩は！　いゝ御機嫌ですね。」

それは、思ひがけなく前川だつた。

「あら、いらつしやい！」

忽ち、美和子は何事もなかつたやうな朗らかさに返つて、明るい双眸に一杯の微笑を湛へて、

「お姉さまかと思つたわ。今日は、お早いのね。」

「お姉様は、何うしたんです！　今日は、まだ來てゐないんですか。商賣不熱心ですね。」

「うゝん。違ふのよ。」

美和子は、含みのある微笑を浮べながら、さりげなく、

「おかけにならない？」

と、前川に椅子をすゝめた。

前川が、ソファに腰を下すと、美和子も近々とかけながら、

「お姉さま、今しがたまで居たんだけれど・・・・貴君が、まだいらつしやらないと思つて・・・・」

と、思はせぶりな物云ひである。

「買物にでも・・・・。」

「さうでもないの。」

「ほゝう。ぢや、お友達でも・・・・」

「えゝ。つまりお友達だわねえ。」

「さうですか。」

と、前川が素直に受けてゐるのが、物足らず、

「云つちや、お姉さまに悪いかしら・・・・」

と、前川の氣を引いて置いてから、

「美澤さんね、ホラお姉さまの愛人だつた人ね、その美澤さんが、先刻茲へ來てゐたの。そして、一揉めもめたのよ。」

前川は、さすがにいゝ氣持がせず、

「揉めるつて、どうして・・・・」

やゝ、せき込んで訊ねた。

「つまり、美澤さんは、私と結婚する氣持なんかないのよ。ほんとうに、愛してゐるのはお姉さまで、私との事なんか、一時の戯れだと云ひに來たんだわ。ふゝふ・・・・。」

美和子は、わざと仰山なしかめつつらをして、低く笑つて見せた。

前川は、不快なショツクを感じて、云ふべき言葉がなくなつた。

「それで、お姉さま、美澤さんを追つて出て行つたのよ。今頃、しんみりと、どつかの裏通りを散歩してるんだわ。私、つまんないわ。」

さう云ふと、美和子はエレクトロラにかけ寄つて、コンチタのレコードを、アンコールした。

三

街角に、美澤に取りのこされた新子は、ぼんやりしてゐる間に、

「ハイ・ヨウ！」

と、目の前を走りすぎる、お座敷へ急ぐらしい藝妓をのせた人力車の梶棒に、危ふく突き飛ばされさうになつて、身を避けると、場所にも在らず、悲しくなつて涙がユル〳〵と流れて來た。

こんな氣持で直ぐお店へ歸つて、美和子と顏を見合はせるのがいやになつて、銀座の電車通の方へ、一人フラ〳〵と歩き出した。

一思ひに、ワツと泣けてしまへば、さぞせい〳〵するだらうが、いろ〳〵複雜な氣持が入り交じつてゐるだけに、悲しみは重く鈍く胸に、わだかまつてゐて、何も持つてゐない兩手に、賴りない淋しさをそゝられて、兩方の袖口に、手を差し入れて、我とわが胸を抱くやうな姿勢で、新子はネオン・サインのにべもなく、續いてゐる銀座の街を、それから二十分ばかり、ぼんやり歩いた。やがて致し方のない事であると云ふあきらめに、悲しみを心の片隅に追ひやつて、もう客も來てゐるであらうバー・スワンへ、戻るべき道を辿つたのである。

お店へ歸つて見ると、客は三組ばかり來てゐたが、美和子はと思つて、見廻すと、先刻まで自分と美澤とが、さし向ひになつてゐたボツクスに、思ひがけなく前川と、さし向ひになつて坐つ

てゐるのである。

前川が、こんなに早くと思つてゐなかつたゞけに、新子は少しあわてたが、前川が向ふむきになつてゐるのを幸ひ、外のお客にはちよつと目禮したゞけで、二階の自分の部屋へ逃げるやうに上つて來た。

先刻の美和子の、美澤に對する態度を見ると、もう美澤などには何の執著もないことが分つたので、また美和子らしい出鱈目さで、前川に對してどんなことをやり出すかも分らないと思ふと、一刻も油斷のならぬやうな氣がしたが、といつて美和子と爭つて、前川の御機嫌を取ることは、死んでもいやだと思つたし、美和子が前川の卓子へ行つてゐる以上、近づくのも汚らはしいやうな氣がしたが、それでも、そのまゝに傍觀するのにはあまりに焦々して來る心だつた。新子は、それがハツキリ嫉妬であることが、自分で分つた。

なにか心も身體も疲れて、壁に背をもたせ、兩足をなげ出して坐つてゐたが、階下のことが氣にかゝりながら、どうしても下へ降りて行かうといふ氣持にはなれなかつた。

二十分間もそのまゝの姿勢でゐると、

「お姉さま。降りていらつしやらない？　皆樣お待ちかねよ。」

と、聲だけは天眞爛漫に、美和子が階下から呼んだ。

四

新子が、ありあまる思ひで默つてゐると、

「お姉さまア！」

と、呼びかけながら、忽ち階段を上つて來る騷々しい足音がした。

その足音を聞いてゐる内に、新子の胸の中には、自分でも思ひがけないほどの激しい憤りを、妹に對して初めて感じた。

「お姉樣！」

扉の外で、もう一度呼んだ。

「何をして、いらつしやるの？」

と、云ひながら、美和子が姿を現した。

新子は、なほ顏をそむけたまゝで、默つてゐた。

「前川さんも、先刻から見えてゐるのよ。知つていらつしやるんでせう。皆さん、お待ちかねだわ。」

美和子が、口を利けばきくほどそれだけ、鬱然と新子は、この妹が憎くなつた。

努めて、靜かに、しかし冷やかに、

「貴女、お家へ歸つてくれたらどう——もう、此處へ來てほしくないのよ。私は・・・」

といつた。

美和子も、さすがに、姉の嚴しい樣子に、ちよつと目を逃らすやうにして、眞面目な表情をしたが、すぐに不貞腐れて、白々しく、

「へえ——。美澤さんとの喧嘩の、飛ばつちりが、わたしに來るの？　迷惑だわ。」

と、いつた。

新子は、自分が男だつたら、何か手ひどい一言をいつて、部屋の外へ突き出したい衝動を感じた。

「お姉樣が、歸れといつたつて、階下のお客樣達は、みんな美和子びいきだわ。」

美和子は、そんな事までいつた。

言語道斷な氣がして、新子が蒼白い顏で、グツと默りつゞけてゐるので、美和子も仕方がなく、

「降りていらつしやらないのならいゝわ。その代りに、前川さん、お歸りになつても知らないわよ。」

默つてゐる新子にも、氣になるにくらしい捨台詞を殘して、サツサと下へ降りてしまつた。

階段の中途からは、はや何時も口ずさむ小唄になり、わざと最後の二、三段は飛び降りたらしい騷々しさと、自分の事を何かおどけて報告したらしく、階下のお客達の笑ふ聲や、美和子の甲高い聲がきこえて來た。

新子は、身内の慄えるやうな口惜しさを感じた。

美和子など、もう妹とは考へまいと思つた。

姉の幸福なら、何んなものでも、立ち入つて來て自分も味はねば承知せず、しかもそれを制せんとする姉の手を、チク〳〵と針で刺す——奇怪な動物のやうにさへ感ぜられた。

新子は口をしさといきどほらしさで、涙が流れ出すと、忽ち糸の切れた珠數のやうに止め度なく落ちた。

五

泣いてゐる内に、頭が熱して來て、終には、悲しさも口惜しさもなく、只無暗と涙が出て來た。

自分でも、かうしてゐては、止め度がないと思つたので、氣を轉じるために、階下へ降りて行つて見ようかと思ひながら、一時涙を納めて見たが、頭の心がボーツとしてゐるし、こんな氣持では、誰の話相手にもなれないと思つたので、

（もう、階下へ行くのは止さう。）

と、新子は、狂的に頭を振りながら、また泣けさうになつてゐた。

三十分も經つてから、やつと涙を納めて、考へると、いつか美澤の事は忘れて、階下にゐる前川の姿だけが、大きく心の中に浮んでゐた。

こんなに、自分が降りて行かないのに、前川さんは、何かの方法で、自分の事を訊ねてくれてもいゝのにと云つたやうな、甘えたやうな怨みつぽい氣持で、また涙が出さうになつた。

それとも、前川さんは、もう歸つてしまつたのか知ら、さうとすれば少し薄情な、と思つた。

美和子が、つまらない事を云つて、前川が氣を惡くして、歸つたのではあるまいかと思ふと、不安な氣がして、容子を見に降りて行かうかと思ふのだつたが、しかし美和子の聲がきこえて來ると、また降りて行くのが、いやになつた。

子供に返つたやうな、新子自身にも、どうにもならない氣持だつた。

しかし、ともかくも、顏を直さうと、鏡臺の前に腰をおろした。

重い椿の花片のやうに、瞼が泣き腫れて、すべ〳〵してゐた。

そのとき、いきなりノックの音がしたので、新子は、ハツと我に返つた。

足音も、氣配も、感じなかつたのに、……もう一度ノックが續いた。

（前川さんだらうか。こんな顏してゐるのに、困るわ。）

と、思ひながら、しかし嬉しくてたまらなかつた。

（おはひり下さい！）と云はうと思つたが、もしも美和子であつたら、シャクだと思つたので、立つて行つて、扉を開けると同時に、

「どうなさつたんですか。」

と、不安さうに訊かれて、新子はやつと微笑しながら、冠りを振つた。

涙でよごれた顏もかまはず、むけながら、

「お歸りにならなかつたんですの？」

と、云つた。

「歸れますか。心配で……しかし、外に客がゐるのに、僕が上つて來たら、可笑しいので、苛々しながら、下で待つてゐたんですよ。」

と、云ひながら、新子の傍へ坐らうとするので、新子はあわてゝ片隅に片づけてあつた椅子を取り出して、前川にかけさせた。

妙に興奮してゐる新子は、たゞ前川が自分の事を不安に思つて、上つて來てくれたことだけで、無上に嬉しく、言葉には云へぬ歡びを、微笑で示すほか、術がなかつた。

六

思ひ切り泣いた後の、開け放しの心を、のぞかれてゐるやうな恥かしさで、微笑んでゐたが、新子は間もなく、緊張した、不安げな準之助の無言に、何か自分の方で、云はねばならない事を感じた。

「あのね。美和子が憎くて、泣いてしまひましたの。みつともないでせう。」

と、少し甘えて、手を頰に當てながらいつた。

準之助は、キヤメルの灰を、無意識に、疊の上に落しながら、

「もつと、外の事があつたんでせう。美和子さんから聞きましたよ。どうなすつたんです？」

と訊いた。

新子は、首を振りながら、ふとぶつつかつた準之助の眼の中に、いつの間にか、愛人同士らしい複雜な表情が宿つてゐるのを見て、あわてゝ眼を逃らせながら、自分でもいゝ加減な返事の出來ない氣持になりながら、その場合無難な返事として、

「美和子が、何を申し上げたのでせう？」

と、彼女の方から訊ねて見た。

「美和子さんの話では、美澤さんといふ方が、先刻見えたさうですね。」

「えゝ。」

と、新子は、素直に肯づいた。

前川は、そこで一寸躊躇してゐたが、

「その方は、美和子さんと結婚なさる筈になつてゐるが、貴女は以前、その方が好きぢやなかつたのですか……」

といつて、あわてゝ後をつゞけた。

「尤も、僕は、そんな事を、お訊きする資格は少しもないんですが……」

と、辯解した。

新子は、前川に對して、氣持の上で、いつはりをいつても、仕方がないと思つたので、素直に柔らかく微笑みながら、

「えゝ」

と、うなづいた。

「ぢや、貴女が輕井澤へ來てゐられた間に、その方と美和子さんが仲よくなつてしまつたわけですか。」

「えゝ。」

「ぢや、こんな事は、僕としては自惚れてゐるか、知れませんが、僕があんな輕はずみな事をしたゝめに、貴女と美澤さんとの間が、變になつたといふのぢやないでせうか。もしさうだと僕はたいへん心苦しいんですが……」

しかし、前川のぎごちない言葉半に、新子は靜かに首を振つて、打ち消した。

前川は、だまつてゐた。

新子は、もつと前川から、いろ〳〵な事を訊かれたく思つたので彼女は靜かに眼を伏せてゐた。

「ぢや、美澤君の氣持が、美和子さんの方へ行つたのですか。」

新子は、かすかに首を振りながら云つた。

「さうでもありませんの。」

「ぢや、……」

前川は、何か云はうとして、じつと新子の双眸を見つめた。

七

「ぢや美和子さんが、あの調子で美澤さんに働きかけるので、貴女が身を引かれたといふ譯ですか……」

と、前川は初めて、事の眞相に觸れて來た。

「えゝ。まあ、それもありますの……」

新子は肯づきながら、靜かにいつた。

前川は、新しい煙草に、火を點じながら、やゝ嚴格な調子で、

「しかし、貴女が本當に美澤さんが好きなら、何も美和子さんの爲に、身を引くには當らないぢやありませんか。それに、美澤さんといふ人は、もちろん貴女の方が好きなんでせう。こんなバーなんか、お廢しになつて結婚なさればいゝぢやありませんか。」

前川は、出來るだけ公正でありたいらしく、感情を殺していつた。

「まあ、貴君まで、私をいぢめていらつしやるわ。そんなに好きだつたら、たとひ相手が妹だつて、身を退いたりなぞ致しませんわ。」

新子は、初めて自分の心をうち明けた。

「ぢや、問題はないわけぢやありませんか。そんなに、瞼の赤くなるほど、泣くには當らないぢやありませんか。」

亂暴にいひながらも、胸の中には、火のやうに、いとほしさが、こみ上げて來てゐるのだつた。

「あら、だつて——美和子は、美澤さんをほんとうに好きでもないくせに、誘惑したやうに……今度はまた！」

と、いつて新子は、その平生の賢さに似ず、なまめかしいまでの羞恥に、もだえて兩手で顏を

掩ふた。

「今度は、亦何うしたと云ふんですか……」

「今度は……羞かしいわ。」

前川は、新子の云はうとすることが分つてゐるに拘らず、それを新子に云つて貰ひたい慾望に燃えて、

「今度は、どうしようと云ふんですか。」

新子は、顔から兩手を離し、その熱くほてつてゐる頰を撫でながら、

「だつて、あの子出鱈目なんですもの。貴君にだつて、どんな事をするか、分らないんですもの。先刻だつて、私が階下へ降りないと云ふと、ぢや前川さんがお歸りになつても知らないなんて、憎まれ口云ふんですもの。私が、持つてゐるものには、すぐ手を出したがるんですもの。とても憎らしいわ」

美和子を憎みながらも、いぢらしい媚態の内に自分に對する愛情を告白してゐる新子を、前川は限りなくいとほしく思つた。

「新子さん。美和子さんなんか、問題ぢやないぢやありませんか。僕がどんなに貴女の事を思つ

てゐるか……」

前川は、今まで抑へに抑へて來た激情が、一時に溢れ出して、前後不覺になると立ち上つて、壁によりかゝつてゐた新子をしつかりと、自分の方へ抱き寄せた。

夫人策動

一

十月になつてから、いくらか日が詰まつて居るとはいへ、七時といへば、まだ夕暮の、そこはかとないあわたゞしさが漂つてゐるのに、廣い邸の中はしんとして、寂しいほど靜かであつた。

外出姿の綾子夫人は、三面鏡の前に腰かけて、粉を落さないやうに、もう一度近々と鏡に顏を寄せて、白粉をつけ直しながら、

「ツル。ツルや。」

と、激しく隣室にゐる女中を呼んだ。

緊張した表情で、扉口にかしこまつた女中へ、

「もう一度、會社へ電話して、何時頃お歸りになつたか訊いてよ。」

と、叱りつけるやうな口調で命じた。

女中は、倉皇として下つて行つた。

知合ひの醫學博士の夫人が遊藝好きで、恰度いたいけな祥子位の女の子に、本式に日本舞踊を習はせてゐて、その踊りの師匠の花柳何某の春秋二度の發表會に、今日がその子の初舞臺である。帝國ホテルの演藝場へ、御義理に引き受けた切符、日頃の交際の手前、一寸だけは顔出しをしなければならなかつた。

一人で行く事に決めてゐたのだけれど、出がけに急に氣が變つて、その子の踊りだけを見ればよいので、それが終つてしまつた後の時間潰しに、良人と一しよに銀座でも歩かうと、急に良人を誘ふ氣になり會社へ電話をかけさせた。と、お歸りになつたといふ。食事をすませて來るのかと、一時間ばかり待つたのに、前川はまだ歸つて來ないのであつた。

わがまゝな、慣り易い夫人は、ぢり〳〵して來、かうなつて來ると妙にしつこく、良人を殘して外出することが出來なくなつた。

電話をかけに、下へ行つた女中が妙に遲いので、自分も階下に降りて見ると、扉の半開きになつてゐる電話室から、

「はア。まだお歸りになつていらつしやいません。」

と、いふ別な電話を受けてゐるらしい聲が、また、ぢり〳〵と癇癪にさはつた。

「もう多分、お歸りになるだらうと思ひますが、ハツキリしたところは・・・・」

と、背後に、夫人の氣配を知つて、オド〳〵と、受けてゐるらしい女中に、

「誰から？」

と、激しく訊いた。

「はア、うかゞつて置きます。」

と、なほ先方へ返事してゐるので、

「誰だつて訊いてゐるのに・・・」

と、小聲で烈しくいふと、女中はあわてゝ送話器に、手を當てながら、

「南條樣とおつしやる方でございます。」

と、小聲でいつた。

「南條！　女の人？」

「はい。」

夫人の嶮しい顏色に、女中はわが事のやうに顫へてゐた。

「お貸し！」

夫人は受話器をひつたくつた。

二

前川夫人は、女中を押しのけながら、

「もし、もし・・・・」

と、きびしい調子で呼びかけた。

「こちらは、ぜひ二、三日の內に、お目にかゝりたいんですの。だから、ぜひ御都合を伺つて置いて頂きたいんですの。お願ひします。」

相手は、まだ此方を、女中とばかり思ひながら、電話を切らうとするのを、

「もし、もし、貴女、誰方です。」

と、夫人は鋭い氣勢で問ひかけた。

相手は、語調の急に變つたのに、氣がつき、少々まごつきながら、

「あら、先だつて、伺ひました南條圭子と、おつしやつて下されば、御主人は御存じでございます。」

と、云つた。

頭に在つた新子とは違つて居るし、聲もたしかに、新子ではないが、しかし夫人は語調を變へず。

「もし、もし、南條圭子さんですつて！　私前川の妻の綾子ですが、主人にどんな御用でございませうか。」

と、切口上で訊くと、

「あら・・・・」

と、小さく、暫く間を置いて、

「まあ、とんだ失禮を致しました。まあ奥さまで、いらつしやいますか。私、お宅にお世話になつてゐました新子の姉で、ございますの。妹が、いろ〳〵お世話になりまして・・・・」

と、言葉が改まつた。

「まあ、新子さんのお姉さま。さうですか。それは、とんだ失禮を・・・・あの主人に、どんな御用

でございますか。」

姉が主人と交渉があるとすれば、妹の方がより以上に何かあるかも知れないと、女らしい敏感さで、ピンと神經を緊張させた。

「あのう、劇の方の後援をして頂いて居りますの。」

「何でございますつて……」

「劇、あのお芝居でございますの。私達、お芝居をやつて居りますの。」

「新子さんも……」

「いゝえ。私だけ……」

「まあ……それは。」

「はア、前川さんには、隨分お世話になつて居りますの。九月の公演にも、切符を澤山引き受けて頂きましたの……」

姉を、そんなに後援するのは、妹と何かある！　夫人の心には、もう嫉妬の焔が、えん〳〵と燃えながらも、言葉だけは、いよ〳〵丁寧に、

「さうですか。それは、ちつとも知りませんでした。私も、劇の方は、嫌ひぢやないんですの。

前川から、何も話がありませんでしたから、ちつとも存じませんでしたの。でも、劇のお話でしたら、私も、出來るだけの事を、致しますわ。今、主人は、ゐませんけれどいらつしやいませんか。」

姉を引き寄せて、目ざす妹の消息を知らうと云ふ夫人は、俄に友達のやうな親しい物云ひをした。

三

學問はあつても、人の好い主人は、忽ち嬉しさうに、

「有がたうございます。明日でも　御都合がよければ、伺はせて頂きますわ。」

と、云ふのを、

「これから、すぐでもいゝわ。その代り、すぐいらつしやいませね。」

と、夫人はさり氣なく誘つた。

「でも、夜分でございますから……」

「此方は、少しも構ひませんわ。どうぞ……その代り、なるべく三十分以内にね。」

「ぢや、うかゞはせて、頂きますわ。」

と、電話は切れた。

側に、おづ〳〵と立つてゐる女中へ、

「もう、會社の方へ、電話しなくつてもいゝわよ。」

と、云つた。

女中は、まだオド〳〵しながら、

「一度かけましたんですけれど、お話中でお待ちしてゐる内に、今の方から、お電話がございましたので……」

と、相すまなさうな女中の云ひ譯を、背中で聽き流しながら、二階の部屋へ歸つて來ると、綾子夫人は、もう一度鏡の前に、苦ぽい笑ひを浮べて、腰をかけた。

もう、四五年前から、夫婦らしい事は、年にいく度もないと云ふ前川である。それだけに、外に女を作るやうな良人ではないと、夫人は信じてゐた。

もちろん、夫婦生活は不滿であつた。夫人は、前川氏を意地惡く眞綿で首を締るやうな苛め方をして、つまり精神的なサヂズムに依つて、その不滿を癒やしてゐるやうな傾向があつた。

南條新子に對して、前川が何となく、好もしい感情を持つてゐるらしかつたから、事にかこつけて、暇を出した。

二人の間は、それぎりだと思つてゐたのに、思ひがけなく、新子の姉と云ふ女からの電話である。姉にまで、餘計な後援をしてゐるとすれば、新子にはどんな後援をしてゐるか、知れたものではない。

その上、氣がついて見ると、この頃前川の歸り方が、以前よりはず一つと遲くなつてゐる。

一昨夜も、自分が歌舞伎から歸つて見ると、良人の容子に、自分より、ホンの一足前に歸つたらしい所があつた。

（これは、とんだ大きい尻尾を摑んだかも知れない！）

と、夫人は憤りと共に、意地の惡い快感を覺えて、何も知らぬらしく、あわてゝ飛んで來る新子の姉を待つ氣になつたのである。

電話の容子では、與し易いと見て、少し調子を合はせながら、新子の事を洗ひざらひ、訊き質してやらうと考へたのである。

四

新子の姉を待つてゐる裡に、前川夫人は何か思ひついたやうに、呼鈴を押して女中を呼んだ。

「いまの電話の人、ちよい〳〵來たことあるの？」

と、やゝ優しく訊ねた。

「いつか一度、いらしつた事があるさうですが、私はお取次ぎいたしませんでした。九月中に、一、二度お電話がかゝりましたことは、存じてをります。」

女中は、まだ恂々としてゐた。

「さうを。」

と、顎であちらへと示しただけでもう顧みず、また鏡に向つたまゝ、考へ始めた。

女道樂の主人が、嫉妬ぶかい夫人を、操る手管を考へるやうに、夫人は、良人と新子と新子の姉との三人をどんなに扱ふべきかを、心ひそかに考へてゐるのであつた。

これは、前にもいつたやうに、夫婦らしい愛情からの嫉妬といふよりも、冷えた夫婦愛が內攻して起る病的なものであるだけに、性質が惡性で、相手を苛めぬいて、出來るだけ、嫌がらせて

滿足を得ようといふのである。

良人が、自分をほんとうは、少しも愛してゐず、たゞ上部の調子だけを合はしてゐることも、とつくに承知してゐた。

だがそのために、今まで放蕩したこともなく、長い物には卷かれろ主義で、ひたすら家庭平和を保持してゐる良人が、物足りない以上に、憎らしくさへ思つてゐる。

こんない、機會に、良人を取つちめて、御都合主義の假面をとりはづしてやりたいといふ肚もあつた。

× × × × ×

つい、目と鼻の四谷からであるから、二十分とは經たない內に、圭子は前川邸を訪づれて來た。

應接室に通されて、腰をかける暇もなく、上機嫌の夫人に迎へられて、初對面の圭子はすつかりうれしくなつてゐた。

「どうぞお樂に。私一人でしたけれど、新子さんのお姉樣だといふもんだから、ついお目にかゝりたくて、お呼びしたのよ。御迷惑ぢやなかつた？」

と、夫人は言葉使ひもやゝ碎けて、しかもそれだけ親しみを見せて、こぼれるやうな愛嬌だつ

た。

「いゝえ、どう致しまして、奥さまにお目にかゝれて光榮ですわ。」

「失禮ですけれど、舞臺の方に關係していらつしやるだけあつて、おなじ御姉妹でも、あなたの方が、ずつとお美しいのねえ。」

「あらまあ！」

と、圭子が、うれしがるのを見ると、夫人は新子とは違つて、惡のないいかにも善良さうな圭子を、いよ〳〵料理し易いと、見てとつたか、氣樂な、碎けた笑顔を向けながら、

「それに、あなたとなら、ほんとうのお友達になれさうだわ。」

と、つゞけざまに好餌をなげる。

五

鬼も棲み、蛇も棲まむ夫人の心の中を知らず、圭子は、夫人の愛嬌に眩惑され、前川さんも、良い方であるけれど、奥様は一倍ました、何と云ふ氣の置けない、いゝ方だらうと感嘆してゐた。

夫人は、心の爪は、油斷なく磨いで、しかも面は、笑みこぼれながら、

「新子さんとも、あれからまだお目にかゝつてゐないのよ。今何うして、いらつしやるの。あの方、ずーつと私の家に、居て頂きたかつたのよ。それが、一寸した行き違ひで、急に歸つておしまひになつて、私ガツカリしてゐるんですよ。子供もよく、なついてゐて、ほんとうにいゝ方だつたわ。今、どうしていらつしやるの？」

「まあ！」

と、圭子は、正直に呆れてしまつた。妹の話では、奥さまとの感情の衝突で、たまらなく厭であるらしい容子であつたが、この奥様の何處が、そんなに厭なのだらうか。見たところ、賢こさうで、親切さうで、しかも現在、暇を出した後までも妹の事を案じてゐてくれるではないか。圭子の考へでは、これは何うしても、新子の心が、わがまゝで、强情であつたとしか考へられなかつた。

「奥様が、そんなに思つてゐて下さるのに、あの人わがまゝなんですのね。」

と、心から氣の毒さうに、申し譯をすると、

「いゝえ。新子さんが、惡いわけでもないのよ。原因といへば、子供のけんくわのやうなの。一寸かうなのよ。……」

と、夫人は益々親しみを見せて、支度といふ字を、自分が小太郎に仕度と敎へたことから、それが新子に支度と訂正されたことだけを、全部の原因のやうに面白可笑しく話した。

すると、圭子は忽ち、夫人に同情して、

「妹の事を、惡く云ふのは、をかしいですけど、それがあの人の缺點なのですの。一寸、誇學的で、融通のきかないところが。まあそんな事で、奥樣に楯ついたりなんかして、ほんとうに相すみませんわ。ほんとうにそんな事で・・・・」

「いゝえ。私も、そんな事に拘泥るのでなかつたんですの。私さへ默つて居れば、何でもなかつたのに、ついあんなことになつて、ほんとうに、お氣の毒な事になつて・・・・」

と、夫人はいよ〳〵圖に乘つて、慈愛ぶかさの限りを見せた。

「御存じでせうかしら、私が、劇の公演のことで、何うしても、お金が入用になりましたので、新子に無心しましたところ、新子が前川さんにお願ひして、お金を出して頂きましたので、やつと公演の始末が出來ましたの。」

「それは、まだ新子さんが輕井澤にいらしつた時の、事なんですの。」

夫人は肝心な點だけは、ちやんと釘を打つて置くのだつた。

「はあ、左樣でございます。そんな御恩になつてゐますのに、いきなり歸つて參りましたので、家でもみんな、びつくりしてしまひましたの。ほんとうに、奥樣のお心持が分つたら、新子もきつと、面目なく思ふだらうと、思ひますわ。私が、代つてお詫び致しますわ。」

と、圭子は、もう一度頭を下げた。

六

新子が輕井澤にゐた頃から、もうそんな金を前川が與へてゐたなど、駭くに足る新事實であつたので、綾子夫人は、急に緊張しながら、

「おや、そんな事もございましたの？　主人は、無口な方ですから、私に何にも申しません。だから、ちつとも存じませんでしたわ。ですから、お電話だけぢや、よく呑み込めないんで、お呼びしましたのよ。私も、新劇はとても好きでございますの・・・・」

「まあ、うれしい！」

「もと、新興座が分裂しない前に、後援者達で作つた火曜會といふのが、ございましたでせう。私、あれに、はひつて居りましたの。だから新興座の公演は、替り目ごとに、見に參つたもので

すわ。」

「まあ。左様でございますか。ぢや、ぜひ私達の劇團も、後援して下さいませんでせうか。まだ、學生が多くて、未完成でございますけれど・・・・」

「いゝえ。その方が、却つて熱があつて、いゝですわ。貴女なんか、御器量はよし、舞臺にお立ちになつたら、見事でせう。」

と、おだてると、

「いゝえ。でも、初演のときは、割合好評でございましたの。」

と、たわいなく得意になるのを見すまし、

「それで、新子さんも、その方面のお手傳ひでもして、いらつしやるの？」

と、さりげなく訊ねた。

人生行路、決して左右を見ない、左右どころか、自分がかうと思つたら、道のない所までも、ズン〳〵歩いて行きさうな、漫畫的にまで、眞つ正直な圭子も、此處でさすがに、一寸思案するのであつた。

妹が、バーに出ることなど、圭子は大反對なので、その事について、新子とは話も一切せ

ず、何事も訊いても見ないが、しかし母や美和子から、間接に聽いたところによると、新子は前川氏が關係してゐるらしい酒場の、カウンターをやつてゐるとの事である。

それを、夫人が何にも知らないのは、可笑しい。

云つてよいか、どうか、一寸思案したが、しかし、こんなに親切な夫人に、物事をかくすのは、いやだつたし、もしいつたことで、新子が迷惑をするとすれば、それは新子が何か、後暗いことをしてゐるからで、新子自身が惡いのであるといふ風に考へた。

「それとも新子さんは、何もしていらつしやいませんの？」

と、やさしくもう一度訊かれて、圭子はつひに、我が事のやうに頰を染めて、

「お恥かしいんですけれど、只今酒場に出て居ります。」

と、云つた。

「まあ、酒場に、ぢや女給さんですか。」

と、夫人の言葉には、歷々と、嘲りと侮蔑とが強く響いた。

「いゝえ。カウンターのやうな事をしてゐるやうでございます。」

圭子は、あわてゝ打ち消した。

七

新子が、バーに出てゐやうなどとは、さすがの夫人にも思ひがけない事だつた。だが、この頃前川氏が、時々酒氣を帶びて家に歸つて來る事を、それに照し合はせると、良人と新子とを掩ふ膜が、一皮一皮めくり取られて來るやうな氣がして、夫人は意地のわるい快感に、興奮しながら、しかし表面はあくまで、冷靜に、

「たとひ、カウンターにしろ、あんな方が、バーに現はれるなんて、勿體ないぢやございませんか。あんなに、教養も學問もおありになる方が……そんなにまで、身を落しておしまひになるんでしたら、私前川とも相談して、何處へでも、お世話致しますのに。」

と、あくまで思ひやりぶかい言葉であつた。圭子は、ぼんやりと、

「でも、何ですか前川さんのお世話で、はひつたやうな事を申して居りましたが……」

と、云つてしまつた。

「まあ！　前川の世話！　そんな事、私にはちつとも申しませんの。をかしいですわねえ。でも、前川の世話だと致しましたら、あの人も考へなしですわね。そんな場所へ新子さんを、お世話するなんて、輕率きはまる事ですわ。」

さう云ひながら、もうハツキリ良人と新子の尻尾を摑み得たと云ふ、あさましい快感で、モヤモヤ逆上上つて來た。

これ以上叩けば、もつとどんな大きい埃でも出て來るかも知れない。幸ひに、この圭子と云ふ人物が、白紙のやうに表も裏もなく、その上此方の思ふ通り、どうにでも染まりさうである。夫人は、自分の策略の成功にひどく、上機嫌になつて、

「その酒場、やはり銀座ですの。有名な家？」

と、訊くと、

「いゝえ。新しい家で、私名前は存じて居りませんの。私、バーなどへ出るの大反對でしたから、よく聽いてをりませんの。」

と、云ふ圭子の答に、ウソはなささうである。

「ほんとですわ。バーへ、お世話するなんていやですわねえ。でも不思議ですわねえ。主人はあまり、お酒も飲みませんのに、人樣のお世話の出來るほど、バーに馴染があるんでせうかしら。」

圭子は、また當惑した。美和子の話では、そのバーは、前川の資本に依るといふ事であるが、

そんな當てにもならないことを、前川夫人に話することは、何か失禮なやうな氣がして、それには返事をしなかつた。だが夫人は、しつこく、

「聞かせて頂戴な。もつと詳しく――ねえ、二、三日の裡に、よく調べてね。私主人をいぢめて新子さんを、どうしてそんな所へお世話したか、叱つてやりますわ。そして、その償ひに、もつといゝ處へお世話するやう申してやりますわ。だつて、バーなんか、いけないぢやありませんか。」

と、云つた。圭子を、體よくスパイにしようと云ふのである。

夫婦愛憎

一

圭子は、夫人が酒場を嫌ふのも、新子の身を惜しんで呉れゝばこそと感激もし、またそんなに、夫人の蔑しんでゐる、バーに出てゐる妹の代りに、顏を赤らめながら、

「はア。」

と、肯づいた。

「貴女、その酒場に行つて御覽になりませんの？」

と、夫人は拔け目なく訊いた。

「いゝえ。私も、奥さまと同じに、妹が酒場へなど出ますの、大反對なものですから、行きもしなければ、それについて、訊ねも致しませんの。たゞ、銀座裏とだけは、聞いて居りますの。」

と、相手にバツを合はせながら答へた。

夫人は、さり氣なく、

「ぢや、お歸りになりましたら、貴女私にお會ひになつたといふことは、どなたにも內證にして、そこがどんな筋合のバーだか、前川も時々行くのかどうか、調べて下さいませんか。そして、私に知らして下さいません？　私、主人をからかつてやりたいんですの。私新子さんを酒場になど御紹介するの、怪しからないと思ひますから、證據を摑んで置いて、たしなめてやりたいと思ひますの。その上で、主人にすゝめて、主人の會社にでも、ちやんとお世話するやうに、申しますわ。私、新子さんは、ちやんとした方で、十分働きのある方だと、思つてゐますのよ。あんな落着いた、かしこい方、職業婦人などには、もつて來いですわ。」

と、口ではさう云ひながら、さすがの夫人も、一切自分には秘密で、新子をバーになぞ入れた

りしてゐる前川のことを考へると、勝氣なだけに、却つて、口惜しさで、胸がふるへて來るのだつた。

だから、先刻から續けてゐた愛想笑ひが、急にゆがんで、いゝ氣で新子の世話などしてゐる良人に對して、出來るだけ辛辣な復讐手段を、考へることで、すつかり興奮してゐた。

この圭子を、手先に使つて、主人が少しも氣のつかない內に、新子をそのバーから、追ひ出してしまふなども一策だが、しかしもつと、主人と新子とを、驚倒させる方法はないかしらと、しきりに考へながらも、圭子には、一寸氣を更へたやうに、

「さう、さう。貴女の御用事の方を、お留守にしては、わるいわねえ。この次ぎの切符、お引き受けすればいゝんでせう。」

と、氣がるく云つたので、圭子は、

「はァ。」

と、嬉しがつた。

「いくらの切符なんですの。」

と、もう、女らしいケチな打算が動いて、圭子が

「一圓に二圓でございます。」

と答へると、

「ぢや一圓の十枚、二圓の五枚お引き受けしますわ。それでよろしいでせう。」

と、かさにかゝつていつてしまふと、夫人の愛想のよさに、百圓くらゐは引き受けてくれるものと、思つてゐた圭子は、アテがはづれながらも、

「はァ、ありがたうございます。」

と、意氣地なく、禮をいはねばならなかつた。

「その代り、新子さんの酒場の正體を、明かにして下さらなければいやよ。主人をからかつてやるの、私とても面白いんだから・・・・主人が、つまらないお世話をしてゐるんでしたら、私の方が、きつとお力になれるわ。」

と、また他意ない微笑を浮べた。

二

圭子を、わざ〳〵玄關まで送り出し、圭子がジヤリ〳〵と小砂利に音を立てゝ、植込のかげに

かくれてしまふまで、夫人は女中とともに見送つてゐた。

「蒸して來たわねえ。曇つたんぢやないかしら……風がないもの……」

と、女中にやさしく口をきゝながら、夫人は二階へ上つた。

しかし、自分の居間には行かず、良人の書齋にはひると、そこの壁にとりつけた電燈だけを、ポツと灯して、大きいライチング。デスクの前に立つと、亂暴に電氣スタンドの鎖を引いてから、まづ眞中の抽出しを、タツプリと開けた。

その中には、その人の性格らしく、不要なものは、一物もなく、右側に關係してゐる會社の書類が幾つかキチンと置かれ、便箋に封筒、疲勞回復藥と、頭痛藥などの小さい瓶が、二つ三つ、夫人の探してゐる新子からの手紙など、影もなかつた。

圭子の話から推しても、手紙の取りやり位あるかも知れない。良人を、のつぴきならぬやうに、取つて押へるには、何か物的證據をと、探してゐるのだが……。

今まで、夫婦間に、何一つ隱すところのないために、どこに一つ鍵のかゝつてゐるところもない、この机こそ、かうなつては屈竟のものである。

袖に五つ、抽出しが付いてゐる。その一つ、一つを、そつと、いぢつた形跡の殘らぬやうに、

何かないかと調べはじめた。

眞白な紙片の中まで、ハタ〳〵と振つて見たりした。

だが、最後の抽出しまで何物も、見出すことが出來なかつた。

夫人は、少し氣落ちがして、最後の抽出しにはひつてゐるピストルや、双眼鏡や、使はない琥珀のパイプなどを、空しく味氣なく眺めながら、いつもながらキチンとボロを出さない良人の態度が、机にまで示されてゐるやうな氣がして、妙な苛立しさを感じてゐた。

夫人は、その時少し疲れを覺えて、腰をおろしたが、ふと先刻二番目の抽出しに、はひつてゐた良人の小切手帳の事を思ひついた。

あらゆる問題は、金錢に關係してゐる。さう思ふと、夫人は良人の小切手帳をとり出して、パラパラめくりはじめた。

夫人は、月々經常費として、二千圓宛良人からもらつてゐる。もつとも、臨時の買物などする時は、別であるが。

だから、良人の小切手帳は、その二千圓の支出を除けば、全部良人の身邊の費用に當てられた筈である。

八月から九月にかけての日付を探つてゐると、控への方に何の名目も書かれずに振り出された金額が、ザツと計算して、八千圓餘に上つてゐる。

三

もしや、新子へとは、直く疑つたが、しかし、金額があまりに、大きいので、良人がそんなに新子へと思ふと、ちよつと信じがたかつた。

しかし、姉の演劇運動の後援をするくらゐでは、新子にはどんなことをしてやつてゐるかも知れず、その酒場も、案外良人が出してやつたのかも測りがたい。もし、さうだつたら、良人と新子との關係は、もうかなり深いところまで、行つてゐるのに、相違ないと、夫人の頭の中には、嫉妬から生れるみにくい臆測が充滿した。

氣がついて見ると、もう八時を廻つてゐる。夫人は、驚いて階下に降りると、女中を促して、自動車の用意をさせて、帝國ホテル演藝場へと急がせた。

著いて見ると、醫學博士のお嬢さんはもう舞臺で、「驚娘」を踊つてゐる。

滿員の客席の間を、足音を忍ばせて、座席に著いた。

祥子と同い年でも、ずつと小柄な、いたいけな幼子が、白く濃く白粉を塗り、青く光るほど紅を塗つて、人形のやうなおかつぱで、重たい衣裳をつけて、踊る舞臺は、佐四郎人形を見るやうであつた。

長唄連中は、勿體ないやうな顏ぶれである。撥音が冴えて、美しかつた。

踊りは、もう半以上を進んでゐて、町娘の衣裳でくるくる日傘を廻してゐた子は、黑ん坊に衣裳のしつけを取られて、驚の本性を現し、合の手の、にぎやかにも、おどろくとした無氣味な音につれて

獄卒四方に群がりて
鐵杖振り上げ鐵の
牙嚙みならし、ぽつ立くく
二六時中がその間
くるりくく追廻りくく

と、帶に描かれた狐火を、ゆらくさせて、いみじく、涙ぐましくなるほど懸命に、踊りぬいてゐた。終ると、割れるやうな拍手であつた。

夫人は、案外無關心に、その舞臺を眺め終ると、早速舞臺裏へかけ込んで、踊り手のお母さんに、お祝ひやら、お世辭やらを述べた。

その周圍に、ウヨ〳〵してゐる顏も、みんな知合の奥さまやお孃さまなので、その人達と無駄話をしてから、連がないので、此の次の「三社祭」を見たら、銀座で買物でもして歸らうかと、大分味氣ない顏付で、バーラーの方へ戻つて來ると、思ひがけなく、木賀子爵が獨りで、綺麗な婦人連の中で、紅茶を飲んでゐた。

「あら、貴君見えてゐたの・・・・」

夫人は、忽ち賑やかな笑顏で、近づいて行つた。

四

引き受けた切符が、あり餘つてゐたので、木賀の妹達には、送つて置いたのだけれど、ハイカラの妹達も、來はしないだらうと思つてゐたのに、木賀が來てゐるので、夫人は驚くと共に、急にうれしくなつた。

「貴君がいらしつて居るとは思はなかつた。・・・・夫人を誘はなくつて、よかつたわ。」

夫人は一寸體裁のよい嘘を云つた。

そして

「よつぽど、貴君暇なのね。」

とからかつた。

「いや、あるお孃さんの踊りを一寸見たかつたから・・・・」

「誰方・・・・」

と、夫人はプログラムを擴げた。

「(四季)の中の春を踊つた人。」

「知らないわ。今來たばかりですもの。もう、大きい方でせう、年の・・・・」

と夫人はからかふやうな眼差で、木賀を見上げた。

その時、開幕のベルが鳴つた。

「ぢや、貴君も御用が濟んだし、私もお義理を果してしまつたんだからこれを見たら、一しよに出ませうか。銀座へ、一しよに行つてほしいわ。」

「えゝ。お供しませう。僕は、もう出てもいゝんですよ。」

「だつて私來たばかりで、歸つちや少し、可笑しいわ、この踊りが終つてからにしませう。これが濟んだら、貴君勝手に出て、私の自動車の中で待つてゐて頂戴！」と云つて、二人はぞろ〳〵座席へ行く、人混の中で別れた。

矢張り小さい子供達同志の「三社祭」の惡玉、善玉の踊りが終ると、夫人はサツサと退場して自分の自動車へ行つて見ると、木賀はもうとつくに乘つてゐた。

自動車が、山下門の方へ動きかけると、夫人は小聲で、

「春を踊つた人、岸田千枝子と云つたわねえ。どこのお孃さん？」

「いや、一寸……」

「をかしいわねえ。その人の踊りをわざ〳〵見に來るなんて！　だから、逸郎さんは、近頃私の所へなぞ、寄り付かなくなつたんだわ。」

「いや、そんな譯ぢやないんですよ。一寸、緣談のある相手ですが、僕は勿論斷るつもりでゐるんですが、仲人が、內山の伯母さんだもんだから、一寸當人位は見て置かないと、ウルさいんでね。」

「ぢやその方とは會つた事ないの？」

「勿論……」

「それなら、かんにんしてあげるわねえ、逸郎さん、とてもニュースがあるの。降りてから話すわ。」

銀座の電車道で、自動車が止まつた。

五

資生堂で買物をすませると、その向ひ側の喫茶部で、夫人はボツクスで、木賀とさし向ひになつた。

「先刻いつたニュースつて、何ですか。誰のニュースですか。」

「今夜聞き立なんだけれど……誰のことだと思ふ？」

「分りませんよ。そんなこといつたつて！」

「ほら、この夏、貴君が輕井澤に見えたとき、南條つて、家庭教師がゐたでせう！」

「えゝ、南條さん？」

木賀は、ちよつとその名前を、なつかしさうにくり返した。

「あの女が、銀座のバーに出てゐるんですつて！」
「女給にですか？」
「カウンターといふ説もあるけれど、おなじことぢやない、どうせ。」
「だつて、あの人…そんなタイプの人ぢやないけれど…何か急激な變化があつたんですね…」
と、木賀は實に意外に思ひながら、輕井澤で見た、淸々しい、しかし澄んだ色つぽさのある新子の全體を、ハツキリと思ひ浮べながら、さういつた。
「貴君、酒場へよく行くらしいから、知つてるかと思つた…案外逸郎さんあたりが、何處かへ紹介したのぢやないかと思つたわ。」
「御冗談でせう。僕は、夢にも知らなかつた！」
「ぢや、貴君、あの人が、何處にゐるか、探して御覽になつたら、どう？」
「探して、どうするんです。また家庭教師になさらうとするんですか。」
「いやな人！　だつて、男の人つて、知つてゐる女が、バーへなんか出ると、とても興味を持つんぢやない？　だから、貴君も、かの女に會つて、かの女の變り方を見るのも、面白いのぢやな

いかと思つて…」
「うむ。」
木賀も、一目見たときから、好ましさで一杯だつた人だけに、夫人に唆かされると、興味を感じずにはゐられなかつた。
その人の立ち働いてゐるバーの容子などを、想像しながら、
「誰からお聞きになりました？　前川さんから？」
と、訊ねた。夫人は、あわてゝ首を振つて、
「いゝえ。前川から、聞きはしないのよ。また、私があの女が、銀座にゐることを知つてゐるなぞと、貴君前川にいはないで頂戴ね。いつたら絶交よ。」
と、いつた。
「前川さんもそれと知つたら、探しさうですか。」
「その危險もあるし、外に私が考へてゐることがあるの。とにかく、あなたあの女の在家を突き止めてくれない？」
圭子を使つてゐる上、木賀も參加させて、どちらからか、事の眞相を、一刻も早く知りたい夫

人の心である。

六

長い間の接吻――それは、偶發的でも、突發的でもない……。

前川の氣持は、青年のやうに昂揚し、幸福と歡喜に躍り上つた。もちろん、それ以上のものを求めようなどゝいふ氣持の起らないほど、理想主義的なものであつた。

持つて生れた平和な性から、不滿な家庭の味氣なさに安住する事に努め、內にも外にも、人間らしい色彩を失ひかけてゐた彼である。

若い純情な、愛し合ふ男女が、最初の接吻に、陶醉し、それ以上の邪心がないやうに……前川も、嵐もなく夕立もなく、心と心とが相觸れて獲た新子の唇に、充分滿足し　青年のやうな歡喜に躍り上つてゐたのである。

假に人生を五十とするならば、あと十年足らずの前川なのだが、戀愛ヌキの漁色だけに、惑溺してゐる知己のAやBを、心の內に思ひ起しながら、

（俺は、君達と少しは違ふのだ！）

と得意な氣持さへ、胸に湧いて來た。

珍しく、十二時近くまで、スワンで過ごして、日比谷から議事堂横を、自動車で走り過ぎながら、前川は幾年ぶりかに、生甲斐のあるやうな樂しさを感じた。

しかし、そんな多くの男性が、さうであるやうに、敬遠して獨りにしてある夫人に、何か氣の毒のやうな氣がして、妻にも一層優しくしなければならないといふやうに、明るく物が考へられて來るのだつた。

門をはひつて、植込から見上げると、夫人の居室に、水色のカーテンごしに、ぽつかりと火がついてゐるのが見える。

彼がモザイクの和土に、靴を脫いでゐると、珍しく夫人自身が、階段を走り降りて彼を迎へた。

前川の樂しい氣持は、そのまゝ他愛ない微笑となつて、夫人を見た。

「おや、大變な御機嫌ね。」

と、夫人は、グツと前川の胸元に、近寄つて來ると、若妻のやうに、前川の唇のまはりの匂を鼻でクン〳〵かいだ。

「お酒召し上つたのね。」

「うん。お止しよ。」

と、やさしく肩に手をかけて、押しのけようとしながら、前川は久しぶりで、夫人を抱き上げたいやうな氣がした。

しかし、夫人は彼の手を冷たく退けながら、極く平かな調子で、

「何處で召し上つていらつしつたの……」

と、訊ねた。

「うむ。一寸、お客したもんだから……」

「へえー珍しいのね。」

夫人は彼の鼻の先で、馬鹿にしたやうに、笑つた。前川は、角に觸れられた蝸牛のやうに、有頂天の氣持から、忽ち身を縮めて、スワンのマツチなぞ、何處へも入れて來なかつたかと、改めてズボンのポケツトに、手をしのばせた。

「踊りの會面白かつた？」

「面白い筈がないぢやありませんか。」

夫人は、冷たい返事をしながら、共に階段を上つて來た。

前川は、一段宛、冷しさまされて行く夢心地であつた。

七

階段を上り切ると、夫婦の部屋の分岐點である。

夫人の部屋は左へ、前川の書齋、居間、寢室は、右へぐるりと建物を廻るやうな配置になつてゐる。

前川は、さりげなく夫人の顏を見ながら、

「眠い！」

と、いつた。そして、すぐ續けて

「おやすみ！」と、別れの會釋をした。

すると、夫人はその手を喰はず、ニヤ〳〵笑ひながら、

「お待ちなさいませ。少しお話がしたいわ。」

と、いつて右へ前川に、ついて來た。

「眠いし、疲れて居るし……、話なら明日にして……」

と、逃げようとすると、

「厭よ。用事の話ぢやないんですもの。貴君つたら、いつでも私が話をしやうとすると、鹿爪らしくお取りになるけれど、たまには無駄話だつてしたいわ。私眠くないんですもの。眠れさうにもないし、少しの間、話し相手になつて下さる御親切が、あつてもいゝと思ふわ。」

「だつて、遅いよ。もう十二時過ぎてるし・・・・」

「それは、貴君が遅くお歸りになるからいけないのよ。意地悪ね。」

そんな事をいひながら、夫人は執拗な態度で、前川の寢室へまで、はひつて來た。

前川は、内心薄氣味わるく思ひながら、ソファにかけた夫人に背を向けて、ネクタイを解き始めた。

「ねえ。」

「・・・・・・・」

「下世話に云ふでせう。ほら、四十を過ぎて始まつた道樂は、中々止まないつて！　心配だわ、私・・・・」

變に、女房らしい事を云ひ出されて、前川は思はず、クスリと、唇邊に笑ひを浮べて、

「何を話し出すかと思へば、そんなつまらんことを。ふざけて居るのかい？」

と、碎けて訊いた。

「いゝえ、眞面目よ。だつて、この頃お酒は召し上るし、それに以前よりお歸りが幾らかづゝ遅いし・・・それに、何だか私の眼にさへ、急に若々しくお成りになつたやうに映るんですもの・・・・いゝ加減、氣になつてしまふわ。貴君、何かお出來になつたのぢやない？」

前川は、首筋に、氷片を落されたやうな氣持ながら、しかし色には出さず、

「をかしな事を云ふね。何か出來たつて、何が・・・」

と、とぼけて訊き返すと、

「愛人か・・・そんなものよ。」

前川は、ドキツとして默つてしまつた。しかし、夫人はさる者、ニヤ〳〵笑ひながら、

「ねえ・・・」

と、眼顔で、押して來た。

八

前川は、急所を突かれながらも、それが夫人の臆測にすぎないと知ると、ホツと安心して、

「そんな冗談にも洒落にもならない事を云ふものぢやありませんよ。そんな事を云へば、貴女だつて、此頃は頓に、美しく若々しいぢやありませんか。」

「嘘おつしやい！」

酒の下地で、常よりは、やゝ圖々しい前川に、夫人はちよつと業腹で、ヒステリツクに、その話を打ち切つて、別の手を考へてゐた。

習慣で、どんなに遲くつても、就床前に必ず齒を磨く前川が、室内の奥についてゐる洗面所の方へ歩いて行く後姿に、

「ねえ、冗談は冗談として、一寸御相談したい事があるの。家庭教師の事で……」

と、云ひさして、夫人は、良人の背中でちよつと舌を出してから、追ひかけて行つた。

四方白い、小さいタイル張りの部屋の中で、前川は默つてゐた。

夫人は、入口からのぞき込みながら、

「ねえ……」

と、押しかけた。

「二學期が、はじまつてから、もうよつぽどになるでせう。やはり、家で勉强見てやつた方がいいらしいんですの。それで、いろ〳〵探してゐるんですけれど、適當の人が、なか〳〵ないのよ　貴君、なんかお心當りないこと？」

前川は、夫人のために、その小さい部屋に閉ぢ籠められたやうな、氣味の惡い感じで齒ブラシの音と水音とで、返事の出來ないことを示してゐた。

「ねえ、何故默つていらつしやるの？」

と、夫人は跳足で、二三歩はひつて、良人の顏をわざ〳〵のぞきに來て、

「あゝ、口を磨いていらつしやるのね。ぢや、お待ちするわ。眞面目に、御相談したいことがあるのよ。」

と、云ひながら、また入口の方に、引き返したが、前川がブラシを使ひ終るのを待つて、

「ねえ、新子さん！」

と、いきなり云つた。

「えゝつ！」

前川が、スハ事こそと、あわてゝ訊き返すと、夫人は、良人の顏を、ジロ〳〵見ながら、言葉

はあくまで、尋常に、

「どう、私、新子さんにもう一度、家へ來て貰はうかと思つてゐるの・・・」

と、云つた。

「家へ、もう一度！」

意外な言葉に、前川は、鏡に映るわが顏へ、思はず聲を出して吃いた。

「ほら。あの南條さん。貴君も、隨分御ひいきであつたぢやないの。」

夫人の聲は、浮々とはずんでゐた。

「しかし、あの人をなぜ呼び戻すのだ！」

前川は、全く夫人に、飜弄されてゐる形だつた。

九

「だつてねえ。」

夫人の聲は、極めて柔かな響きを持つてゐた。

「私、隨分探したんだけど、結局南條さんくらゐ、いゝ人ないと思ふんですもの。」

前川は、夫人の表情を讀みたくなり、思はず洗面所から、身を出しかけた。が、また思ひ直して、手先をゴシ〳〵と洗ひ初めた。

「それに、子供達も、時々思ひ出して、淋しがつてゐるやうですし、貴君さへよければ、私、明日にでも手紙を出して、あの人に來てもらひたいの。貴君、宿所御存じでせう、貴君が御存じなければや、路子さんに訊いてもいゝの。」

前川は、夫人の一言一言に、誘導訊問をする刑事の心理のやうに、意地のわるい計略が、かくされて居るやうに思はれ、これは一問一答と云へども、油斷をしてはならないと思つた。

新子の現在を知つてか知らずにか、自分と新子との關係を、嗅ぎつけてゐるのかゐないのか：・・・前川は、酒の醉もすつかり吹き飛ばされて、醉ざめの後の常より一倍冴える頭の中で、彼も夫人の心中を計るべく、作戰を考へねばならなかつた。

「ねえ、貴君も御異議ないでせう。あの人に、もう一度來て貰ふこと・・・」

（本氣で云つてるのかな）と、前川もつい思つた。しかし、つねに肚と口との違ふ、しつかりもの、夫人である。彼は、少し苛立しくなつて來た。

「ねえ。」

夫人は、しつこくくり返した。

「僕は、不賛成だね。」

前川は、とにかく受け返した。

「あら、何うして…貴君、前には隨分御ひいきぢやなかつたの…」

「……」

前川は、返事に窮して、また手を洗つた。

「ねえ、いつまで顏や手を洗つていらつしやるの…。」

「うむ。」

冷靜を裝つてゐるつもりでも、つい取り亂したと、前川は後悔しながら、さりげなく、彼としては幾分傲然たる態度で、トイレツトから出て來た。

「ねえ。あの人に來て貰ひたいわ。手紙を出しても、いゝでせう。」

「一度、よして貰つた人に、また來て貰ふなんて、可笑しいぢやないか。それよりも、高等師範の學生か何かで、適當な人は、いくらでもあるだらう…」

前川は、一語一語に氣をつけ、芝居の臺詞でもいふやうに、靜かに云ひながら、夫人の眼を探るやうに、ひたと視線を合はした。

「だから、よさせたのは、私の輕率だつたんだから、私あの方と會つて、潔く謝つてもいゝのよ。でも、可笑しいわねえ、貴方が反對をなさるとは、おほゝゝゝ。」

夫人は、前川の窮狀を知つてゐるかのやうに、氣持よげに笑つた。

十

前川は、笑ふ夫人の眼の中に、邪惡な喜びの影を見たやうに思つた。

何か新子について聞込んだに違ひないと思ふと、今宵くちづけの感激も消えはてゝ、當惑せずにはゐられなかつた。

「でもあの方、まだ職業が見つからないで、お困りになつてゐるのぢやないかしら…もしさうだと私、いよ〳〵呼び返してあげたいの…」

夫人は、まことしやかに、眼を輝かした。前川は、容易に動かされず、

「僕はとにかく賛成しない。他の人を雇つた方がいゝ。」

と、藪蛇にならないやうに簡單にいつた。

「でもなぜ新子さんを、もう一度呼んだらいけないの？」

「そんなハツキリした理由はないさ。ある筈がないぢやないか、しかも一度、貴女と感情の衝突をした人を・・・」

「だつて、それは私が悪いと思ふから、謝るつもりなの・・・」

「しかし、謝つて貰つて、來たところが、あの人もいゝ氣持はしないだらうし、貴女だつて、きつと何となくそれに拘泥るだらうし・・・」

「貴君妙だわ。とても、妙だわ。貴君が反對なさるなんて妙だわ。」

夫人は、前川の鼻の先で、チラ〳〵笑ひながら、つぶやくやうに云つた。

妙だと云はれゝば、妙に違ひないだらうと思ふと、前川はいよ〳〵不愉快になつてだまつてしまつた。

それにしても、片足をあげれば、その片足に、他の足を擧げれば、その足に、とりもちのやうにくつゝいて來て人を窮地に陷れて喜ぶやうな夫人の性癖を、今更のやうに、憎々しく感ぜずにはゐられなかつた。

「ぢや、私路子さんと、相談して、とにかく、新子さんの内意を訊いて貰ふわ。向ふで、來たいといへば、貴君だつて御異存はないんでせう・・・」

「およしなさい！」

前川は、つい苛々して來て、いつになく險しい聲を出した。

「まあ！　そんなにまで、反對していらつしやるの。あゝ分つたわ。ぢや新子さんが來ると、貴君の方で何かお差支へがおありになるの？」

「そんなものが、あるわけはないぢやないか。」

前川は、あわてゝ打ち消した。

夫人は、先刻から前川のあらゆる表情動作を、すつかり讀み取つて、先づ今宵はこれでいゝ、あまりしつこく責めると、却つて前川に警戒されるに違ひないと思つたので、口まで出かゝつた小切手帳の問題は、そのまゝにして、

「さう。ぢや、私もう一度考へ直して見るわ。でも、新子さんといふ人、後で考へるとだん〳〵よくなるわ。」

前川には、全く謎の言葉を殘して、アツサリ部屋を出て行つた。

敵か味方か

一

今まで、家中で婆やの次ぎに、起きてゐた新子が、夜更し續きで、つい寢坊になり、此頃では十一時過ぎ迄、寢てしまつても、なほ頭の重い感じである。

女らしい始末の惡い母親と、だらしのない圭子と美和子と、それに肝心の新子迄が寢坊をすると、家の中は常に雜然としてゐる。

新子も、十二時近くに起きたのでは、朝食がひどく不味い。味氣ない氣持で、食卓で朝刊をひろげると、ラヂオの晝間演藝が、今日は新協の放送である。

新子は、時計を見上げながら、スウキツチを入れた。

ベートーフエンの第五シムフオニイが、忽ち家中に、溢れ出した。

美澤の家でも、よくレコードで聞いた馴染の曲だし、しかも混然たる絃樂の、その中の一挺の

ヴアイオリンは、美澤の手で奏でられてゐると思ふと、新子は、チツと放心したやうに、聽き入つてゐた。

十月の半で、美澤がこの頃になると、いつも神經衰弱になる季節だといつて、厭がつてゐたのを思ひ出した。

(今年は、私を清算し美和子も、清算なすつたやうだから、却つて激しい生彩で、藝術に精進していらつしやるだらうが、私は・・・・)

と、考へながら、新子は何か恥しさで、身内が熱くなつた。

大恩は謝せず——新子は今のやうになつてしまつては、前川に禮をいふ事さへも、空々しいほど、世話になり過ぎ、新しい好意を辭退するのが可笑しいほど馴れてしまつてゐる。

酒場は成功して、一夜の賣上げが少い時で、五十圓、多ければ百圓に上つてゐる。

その上、店が安定する迄の費用と云ふ名目で、開店當時、前川から三百圓ばかり貰つた。

新子も、草履を買つたり、好みの帶止めを買つたり、ドロンウオークの麻のハンカチーフを、半ダース買つたり、實用と云ふのではない、形のピチリとした足袋を買つて見たり、さうした消費は、女性に取つては不思議な魅力を持つた快樂である。

このやうな狀態では、激しい戀慕もなく、媚びる氣持もなしに、かうした生活を與へてくれた前川の愛撫を待つことになるであらう。現に昨夜は、戀愛に近い情熱で、前川の愛撫を待つた自分ではないか。このまゝ進めば、結局自分の凡てを與へて、一莖の日かげの花、パトロンと愛人との關係に、青春の日を棄てゝ行くのではあるまいか。

新子は音樂を聽いてゐる裡に、だん〳〵氣が沈んで來て、出ばなのお茶の味さへ消えてゐた。

二階から、この頃連夜の稽古で夜更しをしてゐる姉が、だらしない寢衣姿で降りて來て、新子と向ひ合ひに、

「あ――あ。」

と、欠伸しながら、ドサリと坐つた。

二

「昨夜は、私より遲かつたわねえ。」

新子は、自分も慰められたいやうな氣持で、姉にやさしくいつた。

「うん。昨夜は、外の人の都合で十時から稽古だつたの。切符は賣らなきやならないし、たいへ

んよ。」

姉は、新子の氣持などお構ひなしに、自分の事だけを云つて、

「美和子居ないかしら。」

と、訊ねた。

「知らない……一寸、出かけたんぢやない。」

「煙草が欲しいんだけれど……」

「婆やに、買ひにやらせば、いゝぢやないの……」

と、新子が云ふと、煙草のことは、それぎりにして、

「美和子、もう酒場のお手傳ひはしないんだつて……」

と、訊いた。

「もう、そんな事お姉さんに云つたの？」

昨夜のいさかひを、早くも姉に告げたのかと思ふと、新子は美和子の口の輕さに、腹が立つて來た。

「昨夜、私が歸つたら、まだあの子寢てないで、階下でガヤ〳〵云つてゐたの……」

「さうを、ちつとも知らなかつたわ。」
「私、美和子から、貴女の酒場のこと、いろ〳〵訊いたわ、美和子の所へ來るお客も、隨分あるんだつてねえ。」
「・・・・」
新子は、不愉快になつて、だまつてゐた。
「それに、新子ちやん。貴女、少し嘘つきねえ。」
「なぜ・・・・」
「前川さんの關係してゐる酒場に勤めてゐるなんて、本當は、前川さんが貴女のために作つてくれたお店だつて云ふぢやないの？」
「・・・・」
新子はぴつくりして姉の顏を見上げた。
「かくされると、いゝ氣持はしないわよ。」
「何を云つてゐるの。美和子のやうな子供に、何が分るもんですか。」
「あの子は、あれで子供ぢやないわよ、そんな事にかけちや私達より、ずーつとカンがいゝんで

すもの。私、美和子の云つた事を信ずるわ。」
「だつて・・・あの店、誰のものだか私知らないわ。たゞ、前川さんが、經營しろとおつしやるから私引き受けてゐるだけよ。私、勤めてゐるつもりだわ。」
「だつて、貴女のお部屋はあるし、電話はあるし、立派なものだと云ふぢやないの。私、小池さんなんかを連れて行つてもいゝ？」
「どうぞ。いらしつて頂戴！　歡待するわ。」
新子も、騎虎の勢、やゝ棄鉢氣味にいつた。
「今度の公演のポスターが、昨日出來たからお店にかけて置いて頂戴よ。それから、お客さんに切符賣れないかしら。ねえ、三十枚位賣つてくれない。」
圭子は、薄情さうな顏付で、さう云つた。
「えゝ。」
新子は、憮然たる表情で、味氣ない返事をした。
すると、圭子はいきなりニヤ〳〵しながら、
「一體、貴女と　前川さんと、どう云ふ關係なの？」

と訊いた。

三

姉の鬱骨な端的な問に、新子もグツと詰まつたが、あわてゝはならないと、胸を落ちつけて、

「何だつて、そんな事お訊きになるの？」

と、訊き返した。

「だつて、前川さんの貴女に對する親切なんて、度に過ぎてゐると思ふわ。」

「だつて、初對面のお姉さんにだつて、度に過ぎた後援をして下さる方だもの。」

新子も、負けずにやり返した。

「それもあるわねえ。」

と、圭子は、素直に肯いてから、

「でも、美和子の話では、前川さんは二階の貴女の部屋へ上つて行つて、一時間も二時間も、話し込むといふぢやないの。だから、私心配になつて訊いたのよ。」

又しても、ひどい美和子の告げ口に、新子はカツと上氣しながら、

「だつて、そりやお店の經營や、賣上げや何かの話だつてあるぢやないの。」

と、答へたが、新子は口惜しさで、涙が出さうだつた。

「さう、それならいゝわ。私だつて、貴女が世の中にあるやうに、前川さんを卑しい意味でパトロンにしてゐるとは、考へたくないの。そんな事をすると、前川さんの奥さんにだつてすまないと思ふわ。」

「……」

決して快くは思つてはゐない、前川夫人まで引合に出しての、無慈悲な姉の非難に、新子は胸がつまつて、口がきけなかつた。

すると、圭子は、またニヤ〳〵して、

「でも、何の關係もなしに、やつてゐるとしたら、貴女も相當なもんね。私は、賴もしい妹を持つて心強いわ。」

と、云つた。

「何う云ふ意味なの。お姉さま、それは？」

新子は、聞き捨てゝならぬ氣がして、訊き返した。

「どうつて……。もし、さうなら、凄いぢやないの。つまり、前川さんをかうだもの。」

と、笑ひながら、お手玉を取るやうな手付をして見せた。

新子は、ムカ〳〵しながら、

「お姉さん、貴女、そんな氣持で、私のすることを見てらつしやるの？」

と、激しい眼付で、姉をにらんだ。

「だつて、さうぢやないの。身體を許さないで、相手にあれだけの事をさせてゐるのは、すごいぢやないの。私になんか、とても出來ないわ。」

「お姉さんの馬鹿！」

新子は、到頭かんしやくを起して、姉を怒鳴りつけた。

「あら！　よく知つてゐるわねえ。私は、どうせ馬鹿よ。新子ちやんは、利口者よ。おほゝゝゝ」

と、さも可笑しさうに笑ひ出した。

「お姉さんが、もう少し家の事をかまつて下さつたら、私酒場なんかに出はしませんよ。」

と、新子はつゞけて怒鳴つた。

「惡かつたわねえ。でも、私は劇の外、何にも分らないの。御免なさい！」

さう云ふと、姉は新子の鋭鋒を避けるやうに、トン〳〵二階へ逃げ上つた。

四

姉と爭つた後味の惡い氣持で、お店へ來ると、女給の一人の妙子といふ、チンマリと可愛い顏の少女が、豐かな黑髪を、ブツリと切つて、すつかり見違へるやうな後姿で、水盤の水を入れかへてゐるので、新子は驚いて、

「まあ。勿體ない！」

と、眼を刮つて近づくと、すつかり化粧も變へた顏で、

「だつて、この方が便利なんですもの。」

と、羞かみながらいつた。

「似合ふからいゝわ。」

中々、女學生らしい潑剌たる味はひが出て、よく似合つてゐた。

そんなことで、新子の氣もまぎれ、部屋へちよつと上るとすぐ階下へ降りて來て、少女達と話をした後、よし子のトラムプを借りて、一人隅の方の卓子と、ベーシエンスで、その日の運勢を

占ひ始めた。

こんな水商賣を始めて見ると、新子もいつの間にか、御幣かつぎになつてゐた。自分が六白星だから、七赤、八白、二黑の日は吉で九紫、三碧、四綠の日は凶であるなどと、朝刊の九星を氣にしたり、カードのベーシエンスが、一度でパツと揃へば、吉。そろつても、スペードからでは凶、揃はないときは大凶などと、獨りでその日の客足を占つて見る習慣が、ついてゐた。

トラムプは、幸先よく揃ひさうであつたが、中途でつまつて、結局うまく行かなかつた。

もう一度と、思ひ切り惡く、カードをまぜてゐると、

「いらつしやいまし――」

と、いふよし子の挨拶を聞いて、新子は何と云ふことなしに、立ち立つて、衝立の陰にちよつと身を陰して、客の方を見た。

客は、たつた一人でてれくささうに、部屋の中を見廻して、なか〳〵席に著かうとはしない。

「君達二人ぎり？」

と、少女達に、話しかけるその聲で、新子はハツとなつた。

輕井澤で、前川夫人の遊び友達として、知り合つた木賀子爵ではないか。

客が、もう一足進めば、すぐ顏を見られる衝立の陰なので、新子は急に惡感が、胸に上つて來た。

「落著いたい、酒場だな。」

客は、無遠慮に、部屋中を見廻してゐるので、少女達も、モジ〳〵してゐるばかりである。

相手は、前川とは、それほど懇意でなく、夫人の親しい友達であつて見れば、顏を見られぬに越した事がないと思ひ、木賀が、やつと席につき、煙草を取り出して、うつむいたわづかな隙にサツと衝立の陰をのがれ、バー・スタンドの脇をくゞつて、二階の居間に駈け上つた。

しかし間もなく、よし子が二階へ追つてきて、

「ねえ、あの方マダムを御存じの方らしいの。會ひたいとおつしやるのよ。」

と、扉口に來て呼んだ。

五

木賀などには、今の場合一番來てもらひたくなかつた。いつそ頑張つて、會ふまいかと思つたが、もし偶然來たものだとすれば、會はない方が却つて前川夫人に直ぐ注進されることになりさ

うなので、新子は胸をとゞろかし、顔を赤くしながら、やつと階下へ降りて來た。

「やア、暫く。」

木賀は、案外氣がるに、やさしい調子で挨拶をした。

「暫く、誰方にお聞きになりましたの？」

と　新子はさし向ひに、腰をおろしながら、探るやうに尋ねた。

「いや、だれにも聞きやしません。」

木賀は愉快さうに、首を振つた。

「ぢや、私がこゝにゐること、何うしてお知りになりましたの。」

と、重ねて訊ねると、

「それァ知れますよ。」

と、木賀は事もなげだつた。

「でも・・・・」

と、不安さうな表情を、正直にさらけ出すと、

「こんな所で、新しい酒場を出せば、すぐ僕に分りますよ。」

「だつて、私が居りますのが・・・・」

「そりや、僕の六感」

と、木賀は、いよ〳〵事もなげに笑つた。

新子も笑ひながら、

「こはい六感ですわねえ。私、貴君が、はひつていらしつたのを見てびつくりしましたの。」

と、受けながら、新子の氣持はやゝ落着いた。

「いくら、びつくりしても、あんなに颯爽と、お逃げにならなくつても、いゝぢやありませんか。あれで、貴女だと云ふことが、いよ〳〵分つた・・・・」

「まあ、颯爽と・・・・」

妙な比喩に新子も笑つた。

「貴女が、銀座に出たと云ふ噂だけは、聞いたんですよ。それ以來貴女を探してゐたのですよ。でも、こゝだらうと睨んだのは、僕の直感だつたのですよ。」

「私が、銀座に出てゐるなんて噂、どなたから、お聞きになりましたの・・・・」

新子は、又不安になつた。

「それは、貴女の六感に委せる　多分、當る！」

「まあ！」

（前川さんにですか、それとも奥さんからですか）

と、訊き返さうとしたが、それは相手が前川と自分の關係を知らない場合は、藪蛇になるので、新子は咽喉まで出た言葉を、嚙み殺した。

「とにかく、貴女が酒場のマダムになつたのは、大賛成だ。ロマンチックで、いゝですな。僕は、輕井澤で、貴女と話をした味が、忘れられないんですよ。――カクテル、辛いのをね。一つ、貴女のとこのバーテンダーの腕前を拜見しませう。」

木賀は、新子の心の一抹の不安を外に、他意なく微笑んだ。

新子も、ひやつとした氣持が、まだ胸には殘つてゐるものゝ、とにかく濶達な若者に對する自然な氣安さで、立ち上つてバーテンダーの所へ行つた。

六

銀盆に落花生とカクテルとを載せて、運んで行くと、

「貴女は？」

と、問はれて、

「いけないんですの。」

と、云ふと、

「そりや、つまんない！」

と、云ひながらも、酒ずきらしく、唇を細めて盃を、嘗めるやうに、

「こりや、相當なもんですな。こんないゝバーテンを、何處でお見つけになつたんですか。店の裝飾と云ひ、この店の顧問は、一體誰ですか。」

と、木賀は惡意は、なささうであつたが、少しニヤ〳〵笑ひながら、訊いた。

「さあ　誰でせうか。」

新子は、苦笑しながら、ごまかした。

「案外、前川さんあたりぢやないかな。あの先生、あれでなか〳〵の洋酒通だからなあ。どうです、當りませんか。」

「存じません。」

新子は、打ち消すだけの勇氣はなかつた。

「僕、もう貴女は結婚してしまはれたのではないかと思つた。輕井澤で、この一筋と思ふやうな人でなければならんといふやうな氣焰だつたが、まだ見つからないんですか。この一筋が見つからんので、一寸道草ですか。」

「さあ・・・」

「案外見つかつてゐるのですか。」

「御想像に委せますわ。」

「こりや、いかん、南條さんも、人が惡くなりましたな。ぢや、見つかつてゐるものと考へていいですか。」

「おほゝゝ・・・。」

「案外、前川さんあたりぢやありませんか。」

新子は赤くなつて、

「あら、違ひますわ。そんな風に思つて下さつては困りますわ。」

「ぢや、前川さんはこの店には來ないんですか。」

と、木賀は笑ひながらも、鋭かつた。

「そりや、時々いらつしやいます。でも、それとこれとは違ふぢやございませんか。」

「勿論違ふし、たとひ前川さんが、貴女の後援をしてゐるにしても、僕は變な風には、考へませんよ。前川氏は、紳士だし、たいへんな女性尊重主義者だし・・・それや清らかなものだと思つてゐますよ。しかし、それだけに、貴女が、いつかは前川氏をこの一筋と考へ込んでしまひさうだな。其處に危險がある！」

新子は、ひしと云ひ當てられながらも、躍起になつて、

「まあ、そんなに想像を逞しくなさるもんぢや、ございませんわ。まるで、私が前川さんのお世話にでもなつてゐるやうに・・・」

「いや、さう思ふのは、僕だけではありませんよ。」

木賀の言葉は、なほ朗かであつたが、新子はゾシンと、胸を衝かれた。やはり、木賀が前川夫人のスパイであるやうな氣持がして來た。

七

新子は、急に眞面目になつた。

「もし、そんな誤解をしていらつしやる方がございましたら、貴君がよろしく、辯解して置いて頂きたいわ。」

「そりや、賴まれなくつてもやりますよ。しかし、前川さんがこの店へ時々來るとすると、さう誤解される危險は、充分あるですな・・・・。それに、あの爆彈夫人は・・・・」

「え！」

新子には、何と云つたのか、一寸分らなかつた。

「いや、あの前川夫人ですよ　あの人は、貴女も知つてゐる通り、嫉妬と云ふ點になると、まるで獵犬か何かのやうに敏感ですからね。怪しいと見ると、どんな手段でも取りますよ。あの人は、僕なんかも、貴女に對するスパイとして、利用しようとしてゐるんですからな。ところが、僕はスパイを勤めるやうな顏をして、久しぶりに貴女に會ひに來たんですよ。」

「ぢや奧さんは、私がこゝにゐること御存じなんですか。」

新子は蒼くなつてゐた。

「いや、ハツキリは知らないんです。しかし、貴女が銀座のある酒場にゐることは知つてゐますよ。」

新子は、それを聞くと、自分のやゝ安定してゐた生活が、グラつき搖がされたやうな氣がした。

「誰が、そんな事話したんでせう。」

新子は、何となく恨めしさうだつた。

「誰ですかな。しかし、僕が來たことは安心して下さい。僕は、夫人のスパイを勤めるよりも、必要に依つては、貴女のために、策動しますよ。」

「・・・・」

新子は、木賀の相變らずの朗かな調子に、隨いて行くことが出來なかつた。

木賀も、やゝ、眞面目になつて、

「貴女のために、計るとすれば、前川さんと全然御關係がないとすれば別ですが、もしどんな意味でも、御關係があるとすれば、前川さんは、當分こゝへいらつしやらない方がよくありませんか。でないと、あの夫人は、あれでウルサイですからな。いざとなると恐いですよ。どんな事でもやりかねないんですから。」

それは、木賀の云ふ通りであつた。このわづか一月ばかりの幸福な生活の地平線に、忽ち黑い

密雲の立ち掩うて來るのを感じた。

新子は、さしうつむいたまゝだまつてゐた。

「僕は、貴女のために、奥さんの動靜を探つてあげますよ。必要があれば、時々御報告します。このマツチに、電話番號が、ついてゐますね」

と、バー・スワンと銘のはひつたマツチを、一箱ボケツトの中に入れた。

今更、木賀に對して、前川と何の關係もないと、抗辯するのも愚かしいことであつたし、と云つて木賀に、どうかよろしくと、依頼する氣にもなれなかつた。

木賀は、新子の氣持を充分察してゐるやうに、

「あまり、クヨ〳〵御心配にならなくつてもいゝぢやありませんか。少し注意をすれば、貴女がこの店にゐる事だつて、容易に分りやしないですよ。」

と、木賀は、サラ〳〵云つてくれたが、新子の胸の重い澱みは、どうすることも出來なかつた。

案内者

一

斷髪が散らないやうに、手拭でキツと鉢巻をして、化粧をしてゐる美和子の肌は、眞珠色に輝いてゐる。

「何だ！　朝湯に行つて來たの。ぢや、美和ちやん、一日だけの我慢で、今日は亦、新子ちやんとこのお手傳ひするつもり？」

「うゝん。」

圭子に訊ねられて、美和子は眼に奇妙な色を浮べて、生意氣な笑ひ方をして、首を振つた。

「ぢや、どつか外へ出かけるの？」

「うゝん。」

「ぢや、何うしてそんなに、お洒落するの。」

「別に、當はないの。でも、街を歩いてゐて、さる人に會つた時」相手を少し口惜しがらせるお化粧するの。振られちやつた女の化粧つてのよ。これは・・・・」

「何を云つてるのよ。」

圭子には、美和子の心理なぞ、少しも分らない　美和子は、眞面目な表情で、鏡の中の己に、チツと見入りながら、反り返つてゐるまつ毛の一本一本に、メーヴエリンを塗つてゐる。刷毛で

つけた頰紅を、脱脂綿でまたほの〳〵とふきとり、上唇に濃いルージュを、下唇に移して、油性のクリームで光らせる。

圭子も惹きつけられて、鏡の中の美和子の顔を、まんぢりともせず、眺めてゐる。

やがて、アルコールで溫めたこてを取り上げて、額ぎはの髪の毛を、すだれのやうに、カールして

「どう……クローデツト・コルベールのクレオパトラ見たいぢやない？　綺麗！　綺麗！」

と、獨りで悦に入り始めた。

「どうかと思ふわ。せい〳〵少女歌劇のクレオパトラ位だわ。あんたのやうなのを、ベビー・エロといふのかしら。」

「うゝん。この頃は、チビ・エロといふんだつて？　でも綺麗なことは、お姉さんだつて認めるでせう。」

「あんたが、うぬぼれなければねえ。でも、あんたのやうなお化粧は、お化粧の範圍を通り越してゐるわ。化粧だわ。」

「だつて、ネオン・サインの街を歩くのには、私のやうなお化粧でなければ、刺戟がないつて！

この間、雜誌に出てゐたわ。」

「ねえ。どこも、出かける當がないんなら、私の方へお手傳ひに來ない？　でも、私は新子ちやんぢやないんだから、お給金なんか上げないわよ。」

「えゝ、行つて上げようか。私今日から毎日一度宛、銀座を歩くことにしたの。だから、丁度いわ。私、銀座で會つたら、示威をしてやりたい人があるの。」

「下らない。來て呉れるのなら、一しよに出かけるから、サツサと洋服著てよ。」

「ハイ、ハイ」

と、美和子は立ち上りながら、

「私も、お姉さんのやうに、舞臺へ出ようかな。」

と云ふと、圭子は、

「駄目！　貴女のやうな精神的な翳影のない人は駄目！」

「へえ」

と、唇をそらした美和子の表情の方が、姉よりは、ずーつと翳影があつた。

二

天性明るく淡白な美和子ではあつたが、しかし、意地つぱり屋であつた。

美澤の心の中に、新子に對する淸算しきれないものがあるのを知ると、何か苛々して來て、ひたむきに美澤を追ふ氣になれず、その不滿をまぎらすために、姉の酒場で働いてゐると、そこへ美澤が現れて、

（君とも會はないよ！）と、何か新子を淸算するお添物のやうに、あつさり片づけられてしまふと、美和子は口惜しくて仕方がなかつた。

何か、あつと云ふやうな事をやり出して、美澤や姉に思ひ知らしてやりたい氣がしてゐた。

だから、圭子に精神的翳影がないから駄目と、あつさり云はれても、姉の世話係として、劇團へ出入する裡に、自分も舞臺へ出る機會を掴むつもりでゐた。

圭子達の今度の公演の場所は、帝國ホテルの演藝場であつた。だが稽古場としては、銀座裏の櫻亭と云ふ貸席を借りてゐた。

美和子は、その朗かな性質で、忽ち劇團の人達と、お友達になつてしまひ、姉の手傳ひばかり

でなく、誰の用事でもしてやるので（美和ちやん／＼）と皆から重寶がられてゐた。

今度の出し物は、日本の現代作家の創作戯曲であつた。

第一夜は、滿員に近い盛況であつた。

第二日目の夜、樂屋入をして間もなく、圭子は面會のお客があつて樂屋から出て行つたまゝ、しばらく歸つて來なかつた。

二十分も立つた頃、座員の一人が美和子の所へ來て、

「お姉さんから、ホテルのグリルにゐるから、君にもすぐ來い！　と云ふ言傳だぜ。」

と、云つた。

「御飯喰べてゐるのかしら。」

と、美和子が訊き返すと、

「さうだらう。君にも、御馳走してくれるんだぜ。」

「素的！　素的！」

美和子は、雀躍りして演劇場からは近い、ホテルのグリルへ駈けつけた。

やつと六時を過ぎたばかりなので、廣いグリルには、お客の影が少く、姉と見知らない一人の

婦人とが、入口から左の少し小高くなつてゐる床の卓子に著いてゐるのが、直ぐ眼にはひつた。

美和子が、わざと靴音高く近づいて行くと、姉が直ぐふり返つて、

「美和ちやん、來たの。こゝへおかけなさい。」

と、自分の右側の椅子を、卓子から引きはなした。

姉と話してゐた夫人は、そのときチラと美和子の方を、微笑で見上げたが、美しい顏に似合はず、何か人を威壓するやうな氣位のある人だつた。

相手は、頭を下げないので、美和子も顎と上體だけを一寸動かすやうなお辭儀の仕方をして、席に著いた。

三

美和子が席に著くと、すぐ簡單な食事が運ばれた。

「これが、一番下の美和子でございます。」

と圭子が先方へ紹介した。

「さうを」

相手の婦人は、鷹揚にうなづいて、やゝ險のある美しい眼で、ジツと美和子をみつめてゐたが

「何方も、それ〴〵美しいわね。でも、この方が一番モダーンね。」

といつた。

美和子は、相手が何人か分らないので、たゞニコ〳〵笑つてゐたが、その婦人の右の手の無名指に輝いてゐる五キヤラツトはありさうな燦爛たるダイヤに驚いて目を刮つてゐると、パンを取り上げた左の手にも、同じくらゐの石が光つてゐるのを見つけて、(アツ)といふ叫び聲を、口の中で、やつと嚙み殺したのであつた。

男なら、誰の懷にでも、忽ち飛び込んで行く美和子だつたが、女となると割合、好き嫌ひが、ハツキリしてゐて、最初の一瞥から、美和子はこの夫人が、あまり好きでなかつた。

食事が終りかけた時、姉の圭子は、以前からの話の續きらしく、

「私が、御案内してもよろしいんですが、開幕前で、何となく落著けませんし、妹ならもう行きつけてゐるんですから。」

といつて、相手の夫人が、うなづくと、今度は傍らの美和子に、

「ねえ、美和ちやん、この方、私の芝居の後援をして下さつてゐる方で、新子ちやんとも、懇意

にしていらつしやる方なの。新子ちやんに、會ひたいとおつしやるから、貴女バー・スワンへ案内してあげてくれないこと？」

「何方？」

美和子は、さすがに、相手の名前を訊ねた。

「前川さんの奥さま。」

圭子は、さりげなく返事をした。

「まあ。さうを。」

と、美和子は改めて挨拶したが、しかし、美和子は、その老成した頭で、新子と前川との只ならぬ關係を略察してゐたので、前川夫人を新子の酒場へ、案内することが、何ういふ役廻りであるか、すぐ思ひ當つたので、

「でも、新子姉さん。驚かないかしら。」

と、眞面目な顏で云つた。

だが、若々しく愛らしく見える美和子のことなぞ、無視したやうに、夫人は圭子に、

「圭子さん。いろ〳〵ありがたうお忙しい處を。ぢや、しつかり、おやり遊ばせ　明日改めて、

拜見に參りますわ。」

と、云ふと立ち上つた。

「厭だ！　ずるいや。」

と、夫人が二、三間歩き出したとき、美和子は、姉に低くつぶやいたが、後から姉に押されて仕方なく一しよに戸外へ出た。

四

美和子は、姉の圭子が、このいやな案内役を體裁よく、自分に押しつけたのだと思ふと腹が立つて仕方がなかつた。

彼女は、わがまゝで隨分新子に迷惑をかけてゐたが、しかし自分には、一文の得にもならないことで、新子を苛めたくはなかつたし、その上この夫人を一目見たときから、何となく蟲が好かなかつた。

だから、夫人と素晴らしい高級車に、一しよに並んで乘つてからも、彼女はつんとすましてゐた。

全然、美和子を子供だと見くびつてゐるらしい夫人は、美和子の機嫌の惡いのを、さういふ性格だとでも思つたらしく、いろ〳〵露骨に、南條姉妹の戸籍調べのやうな質問ばかりしてゐた。

しかし、さうなるとかの女は、さゞえが戸を閉めたやうに、無口になつてゐた。

ホテルから、新橋よりのバー・スワンへは、物の三分ともかゝらなかつた。

自動車が止まると、美和子は常よりも、もつと身輕に飛び降りて、ゆつくり落著を見せてゐる夫人に、

「一寸。お待ち遊ばして！」

と、さりげなく云ふと、自分だけ、姉の店へ飛び込んだ。

扉口のすぐ傍のボックスにゐた新子は、勢ひよくはひつて來た美和子を見て、

「何と云ふはひり方！　もう、來ないのかと思つてゐた！」

と、皮肉を云つた。

「それどころぢやないわ。前川さんの奥さんが來たのよ。」

「えつ！　貴女が連れて來たの。」

「だつて、圭子姉ちやんが、無理に、私に案内させるんだもの。お姉さん、困るでせう……」

新子の顏から、一時に血の氣が引いて行くやうな感じで、口がきけないらしかつた。

「お姉さま、私を恨んぢやいやよ。圭子姉ちやんが惡いのよ」

「……」

新子は、ふら〳〵したらしく、後の衝立によろけかゝりさうになつた。

「いゝぢやないの、お姉さま、何も恐がらなくつてもいゝぢやないの　何も、お姉さま、何にも惡いことしてないんでせう。グヅ〳〵いへば、お姉さまだつて、いふだけいへばいゝぢやないの。」

「だつて、なまやさしい方ぢや……」

と、新子がいひかけたとき、待ちきれなくなつたらしい夫人が、扉から早くも半身をのぞかせて、

「私は、はひつてもいゝんでせうね。」

と云つた。

新子は、そのまゝ立ち竦んでしまつたやうに、夫人から視線をそらす事も、首を下げることも出來ず茫然としてゐた。

夫人は中へ足を踏み入れながらも笑顔を見せてゐたが、それは異常な緊張の微笑である。かうなると夫人の高雅な鼻の形などは、それだけの凄味を呼ぶのであつた。

五

新子は、夫人の姿を見た瞬間からあさましさと、恐ろしさとで、床のないところに立つてゐるやうな感じがして、身體がわな〳〵ふるへた。

「隨分立派ね。」

夫人は、新子には會釋もせず、部屋の中を一わたり見廻した後、なすところを知らず、棒立になつてゐる新子を見ていつた。

「ほゝゝゝ。駭いたらしいわね。私が、何も知らずにゐるなんて、思ふ方が間違ひよ。」

新子は、胸を衝かれたやうな思ひであつたが、その言葉をきつかけに、やつと視線をそらしながら、機械的に頭を下げた。

「私、貴女にいろ〳〵訊きたいことがあるの。答へて下さるでせう。」

店にお客が二組位あるので、さすがに物柔い調子ではあつたが、新子は何とも答へられず、た

たおぞましい悲しさで、胸が一杯だつた。

「お客の居るところで、話しするのは、私はいゝけれども、貴女はいやでせう。靜かに話しの出來る所ないかしら……」

と、夫人は早口に云つた。

すると、美和子が、

「お二階のお部屋にするといゝわ。私、御案内するわ。こちらへいらしつて下さい。」

と、云つて先きに立つた。

新子は、薄情な美和子の言葉を遮ぎる氣力もなかつた。

夫人が、何を訊くのだらう。その訊かれた事に、何と答へ、何と抗すればいゝのか。傷もつ脛の弱味で、どんなヒドい言葉でも、どんな無慈悲な侮辱でも、甘んじて受けなければならないのだらうか。顏を逆さまに、撫でられるやうな氣がして、何うしていゝか分らなかつた。

嚴然たる態度で、奥へはひる夫人を、美和子は階段の所まで、案内すると、飛ぶやうに姉の所へ引き返して來た。

「大方、こんな事だらうと思つたのよ。だから、私いやだつたのに、圭子姉さんたら、否應なし

に私に押しつけるんだもの。御免なさいね。でも、二階へ上げて、話した方がいゝわ。お店で話してゐるところへ、前川さんが、ひよつくり來ようものなら、たいへんな事になつてしまふぢやないの。だから、私下にゐて、前川さんがはひつて來たら、善後策構ずるわ。」

子供だと思つてゐると、一旦緩急の場合には、相當頭の働く美和子の顏を、新子は少し呆れて見つめてゐると、

「そんなに悲しがることないわ。お姉さん、勇氣を出しなさいよ。構はないぢやないの。よしんば、前川さんに、どんな事をして貰つてゐるにしろ、お姉さんがあの奥さんに、責任を持つことないぢやないの。ねえ、勇氣を出して、會つていらつしやい。下手に、謝まつたりしたら、いやよ。堂々と、戰ひなさいよ。」

やんちやなだけに、かうなると頼もしい妹である。

貞操問答

一

來て見る迄は、夫人もかほど迄に、新子に對する良人の心づかひが、行き屆いてゐるとは思つて居なかつた。

階下を見て驚き、二階へ上つて見て、新子の私室らしい小部屋を見て、驚いた。

すべては、小ぎんまりとしてゐたが、季節の飯蛸のやうに、充實してゐる。階段を上るときに電話が引かれてゐるのも見逃さなかつた。

夫人は慣らしさと口惜しさと、良人に對する馬鹿々々しいと云つた嘲りを覺えるだけて、良人の愛情にのみ生きてゐる妻のやうに、嫉妬から來る苦痛は少しも感じず、こんなにまで、良人の世話を受けてゐては、どんなに面詰しようとも、相手はグウの音も出まいと思ふと、彼女の心は躍り、眼は輝き、新子が上つて來る二、三分の間も、もどかしいほど、心がはやるのである。

×　×　×

新子は、このまゝ逃げ出してしまひたいやうな、激しい衝動を感じて、葉をもつかみたい今の氣持には、美和子に勇氣づけられたことで、やつと心を落著け、メヅーサの首のやうにも恐ろしく思へる夫人に直面すべく、階段に足をかけた。

×　×　×

階段を上つて行く姉の後姿に、さも絶望したやうな憐れな容子があるので、美和子はいたく心

を動かされた。

ぼんやりしてゐるよし子や妙子の側へ行くと、

「貴女達、氣にかけないで、お客さんの方よろしくね。レコードかけて、大いに騒いでゐてね。前川さんが來たら・・・」

と、云ひさして、小ざかしくも頭をかしげて物思ひながら、

「あんまり、二階の話が長いやうなら、私容子を見に行くかも知れないから、その後にもし前川さんが來たら、一寸取りこんでゐるから、資生堂へ行つて居るやうに、話してくれない、ね・・・」

と、云ふと自分も、奥へはひり階段の下から、二番目のところまで昇つて、上の容子いかにと聞耳を立てるのであつた。

× × ×

新子が、自分の部屋へはひると、夫人は新子のベッドの端に腰をかけながら、皮肉な微笑を浮べて、新子を迎へた。新子が、また落著を失つて、ションボリとその前に立つと、

「ほゝゝゝ。南條さん、しばらく。私が、いきなり來たので、隨分驚いていらつしやるらしいわねえ。でも、私の方だつて隨分びつくりしてゐますのよ。私、偶然、貴女のお姉さまとお友達になつて、貴女がバーなどに、勤めていらつしやるつて聞いたんで、びつくりしましたの。貴女のやうなインテリ女性が、こんな商賣をなさるの、勿體ない氣がしましたの。そして、酒場へは主人がお世話したといふ話でしたけれど、まさかと思つてゐました。でも、こゝへ來て、私驚いてしまひましたわ。この家は、たしかに主人が出した店ですわね。私が見覺えのある裝飾品だつて、三四點あるんですもの・・・」

と、征服者のやうに笑ひながら、

「新子さん、貴女、お腹ン中で、私のウカツさを笑つてらしつたでせう。」

と、云つた。

二

こんな事で、取り亂しては、自分の品位に拘るとでも思つてゐるのだらうか、態度だけは、あくまでに冷靜に、言葉は針のやうに鋭く、

「まさか、貴女もこのお店と、主人とが何の關係ちないなんて、おつしやらないでせうね。家具の好み、裝飾の好み、これはたしかに前川ですよ。色の調子なんか、私の家の主人の部屋と、そ

つくりですもの。」

新子が、良心的である以上、今更さうした斷定に抗することは、出來なかつた。

夫人は、最初の前提をしつかり定めるべく、

「この店を前川が出した事を貴女否定なさらないでせう？」

「……」

だまつてはゐたが、不覺にもかすかに、うなづいた。

「貴女だつて、惡人ぢやないんでせうから、こんな見えすいたことまで、かくしはなさらないわけね　ぢや、お訊きするわ……」

と、夫人はさも輕蔑したやうな調子に變り、

「私と主人との間には、今迄は何の秘密もなかつたんですのに、私に全然内證で、主人が貴女の世話をしてゐるなんて……　一體、貴女は主人の何なんですの！」

と、冷靜を裝つてゐる夫人の眼も、さすがに光つた。

新子は、懸命な努力で、

「前川さんと私、何でもございません。たゞ御親切にいつて下さるもんですから、この店で勤めさせて頂いてゐるだけですの……」

と、いつた。

「さう！　ぢや、貴女は雇人ですの。でも、雇人の貴女が、こんなハイカラなベツドや、立派な鏡臺を持つてゐるんですの……」

と、夫人は先づ、鋭い皮肉を浴せて置いてから、

「南條さん、貴女は、口では綺麗なことばかりおつしやるけれど、貴女と私達一家とは輕井澤で御緣が切れてゐる筈でせう。それだのに、なぜ主人と交渉を……しかも並々ならぬ交渉をお持ちになつてゐるんですか。しかも、妻たる私に、内證に。それが、私には不可解なのですよ。貴女が、最初から私と、何の面識もない、どつかの職業女性なら、こりや私文句は云ひませんわ。ところが貴女は、かりにも、半月なり一月なり、同じ家にゐて、私と朝夕顏を見合はせた關係でありながら、私に内證で、前川と特別の關係をお持ちになる。主人が貴女を再び呼んだのか貴女が主人を呼び出したのかどうか知りませんけれど、一切私に秘密に　こんな如何はしい店に、貴女がゐて、毎晩主人と會つていらつしやる。さう云ふことはかりそめにも　敎育のある淑女のなさることでせうか。貴女自身可笑しいと、お考へにならないのですか。そんな事をなさつては、

貴女を立派な淑女として、私の家へ紹介した路子さんに、申し譯がないとは、思はないのです か・・・・」

三

層々と疊みかけて來る夫人の、一言一言劍を並べたやうな鋭い侮辱に、新子は完膚なきまでに斬り苛まれながらも、返すべき言葉は見當らず、たゞじつとこらへる全身の口惜しさに、指先が烈しく震へて來るのであつた。

夫人は、新子が自分の言葉に、打ちひしがれて返事も出來ぬ容子に、有頂天になり、口で與へ得るかぎり、あらゆる侮辱を與へて、二度と再び前川の周圍に、立ち寄らせないことにしようと頭の中でいろ〳〵効果のある云ひ廻しを考へた後、

「こんな生活なんて、大抵自尊心のない、無教育の女がやることですけれど、貴女は不思議ですわね　專門教育をお受けになつたくせに、よくこんな寄生蟲的な生活がお出來になるのですね。」

と、(つまり、貴女は教育があるのに、人の妾になるのか。)と、云はんばかりの言葉で嘲つた。

新子は、たとひ貞操は賣つてゐないにしろ、形式だけはさう思はれても仕方のない生活をして

ゐるだけに、夫人の非難の少くとも半分は胸にヒシ〳〵と徹へるので、心はしい木にかけられたやうに苦しく、なぜこんな生活に、足を踏み入れたのだらうかと、我が身があさましく思はれて、危く涙が出かゝつた。

その上、新子がだまつて居れば居るほど、それはいよ〳〵夫人の氣勢を、煽ることになるらしく夫人はいよ〳〵圖に乘つて、

「この店で、働いて居るなんて云へば、とても體裁がいゝけれど・・・私は、良人が、こんな不見識な商賣をして居る事だつて、我慢出來ないんですよ。私の實家や、お友達にでも知れようものなら、良人はともかくも私までが、どんなに恥しい思ひをする事でせうか。しかも、以前、私の家で家庭教師をした女を、その店のマダムに使つてあるなんて、分らうものなら、それこそ、いい加減醜聞ぢやないでせうかしら。それにしても、貴女に長く子供達を委せて置かなかつたことは、かうなつて見ると、ほんとうによかつたと思ひますわ。」

夫人は一層意地わるく、ヂリヂリと新子を責め始めて、

「あのまゝ、貴女に長く居て頂かうものなら、それこそ私の神聖な家庭まで、汚されたかも知れませんわ。」

「まあ！奥さま、それは何う云ふことなんですか。」

と、新子も堪りかねて云つた。

「何う云ふことだか、貴女の胸に手を當てゝ、訊いてごらんなさい！」

「だつて、奥さま、私前川さんと何も邪しい！」

新子の口惜し涙は、到頭頬に糸を引くまでになつて、身をふるはせながら、必死に叫んだ。

「ぢや、お訊きします。貴女は、この部屋で、前川とお會ひになつたでせう。それとも、お會ひになりません？　この部屋、このベッドなんか置いてある部屋で！」

夫人の額にも、激しい嫉妬の影がひらめいた。

四

西洋では、男女二人ぎりで會ふ時は、部屋の扉を開けて置くと云ふ、日本はそれほどでないにしても、ベッドの在る部屋で會つてゐれば、どんな疑ひをかけられても仕方のない道理なので、急所を衝いて來る夫人の言葉に、新子はまた一太刀斬りつけられた思ひで、

「でも何にも・・・・」

といつたまゝ、後の句が告げないでゐると、夫人は緩急自在、やゝ鋭鋒を收めた形で、

「まあ、いゝわ。今までの事は、何うだつていゝわ。よしんば、貴女と主人との間に、何かあつたにしろ、どうせ主人の氣紛れか過失だつたと思ひますわ。主人が、貴女のやうな人を本氣に愛してゐるなんて、考へられないんですもの。だから、今迄の事は深く咎めないわ。たゞ、これから、先のこと私の心配してゐるやうな醜聞が、世間に廣がらないやうに、貴女にも考へて頂きたいのよ。そのために、私恥を忍んでこゝへ來たんですから、貴女だつて、いづれはお嫁にいらつしやる身體でせう、今下らない噂なんか立てられたら、一生の恥ぢやありません？」

さう云はれゝば、その通りには違ひない。しかし、新子は素直に、肯く氣にはならなかつた。

「だから、私、貴女が主人と、何でもないとおつしやるのなら、それを信じたいわ。貴女も、信じて貰ひたいでせう。でも、貴女が潔白を證據立てるのには、この店から、今晩にでも出て行つて頂くのが一番よくないかしら。貴女が一介の雇人だとおつしやるのなら雇人だと云ふことを、私の前で見せて頂きたいの。ねえ、南條さん！　私の申し上げることが、無理かしら。」

先づ名分論で、新子をさんざん痛めつけた上、今度は實際論で、新子を窮境に追ひ込まうといふ作戰であつた。

新子としても、かほどまでに惡辣な夫人に對しては、教養も外聞もかなぐり捨てゝ、滅茶苦茶な論戰を開くか、でなかつたら、夫人の面前で前川との關係を、きれいに淸算して（お騷がせしてすみません）とアツサリ引き下るか、二つに一つを出ないのであり、しかも今更、夫人と、いぎたなく口爭ひする勇氣もない以上、今はサラ〳〵と引き下る外ないのであるが、しかし、たゞこのまゝに出て行くのは、何と云つても口惜しく、敵はぬまでも、何かしら云つて見たく、

「でも、私前川さんから、このお店を、お預りしてゐるんですから、前川さんから、お話がない以上は……」

と、云ひかけると、夫人は輕く引き取つて、

「それはいゝぢやありませんか。この店が前川のものである事を、貴女が認めていらつしやる以上、前川の妻の私が、出て下さいと云ふ以上、お出になつてもいゝぢやありませんか。バーテンダーを呼んで下さいませんか。私バーテンダーに話しますから。」

新子に取つて、はや絕體の場合となつた時、何と思つたか、美和子が、氣樂さうな笑顏で、いきなり扉を開けて、部屋の中をのぞき込んだ。

五

美和子は、姉の泣き顏を一目見ると、急に前川夫人に對して、猛然たる敵意を感じたらしく、その可愛い眼に、殺氣を漂はせ、部屋の內にはひつて、姉の傍に步み寄りながら、

「お姉さま、何うしたの？」

と、いつて訊いた。

「……」

新子は、さすがに妹の肉親の情の賴もしく、それだけまた悲しくなつて、口がきけずにゐると美和子はいきなり、前川夫人に對して、

「奧さま、何うしたと、おつしやるんですの。私に、案內させて置きながら、お姉さまを苛めるなんて、厭ですわ。」

と、喰つてかゝつた。

夫人は、この小ィちやい娘を、ハナから無視してゐる事とて、

「貴女は、お若いんだから、下へ降りてゐて下さらない？」

と、アツサリ片づけようとすると、

「いゝえ、いやですわ。お姉さまを苛められて、私だまつては、ゐられないわ。」

小さい身體が、まるで反抗の塊のやうに、飛びかゝつて來さうである。

「まあ！　私いぢめてなんかゐませんよ。」

「いゝえ。いぢめていらつしやるんですわ。きつと、お姉さまに、いろ〳〵な疑をかけて！」

夫人も、少し本氣になり、

「だつて、そりや疑はしい事を、いろ〳〵するんですもの。」

と、いつた。

「疑はしい事つて、何ですの」

「貴女のやうな、小イちやい人には、話せないことだわ。」

「それなら、分つてゐますわ。お姉さまと、前川さんとの間を、疑つていらつしやるんでせう。」

「おませね　貴女は……」

夫人は、眉をひそめながら、いま〳〵しさうに、

「それなら、貴女にもいつてあげるわ。どうせ、貴女も圭子さんも、新子さんの緣で、前川の世

話になつてゐるんでせう。さういふことを、貴女は自分で可笑しいと思はないんですか。前川と新子さんとが、普通の關係で、貴女方姉妹までの面倒が見られますか。」

と、夫人は手きびしくやつゝけたつもりでゐると、美和子はケロリとして、

「あら、それは、奥樣のひどい考へ違ひですわ、お姉さまなんか品行方正よ、ちやんとしてゐるわ。」

「品行方正で、こんなに前川の世話になつてゐるんですか、前川と何でもなくて、こんなにまで前川の世話になれますか。」

「あら、お姉さんは、前川さんの何でもないわ、たゞ、前川さんがお姉さんを、トテも好きなだけだわ。」

それは、まさに夫人の自尊心を、眞向に割りつけた返事である。

たとひ、良人と新子との間に、關係があつたにしたところで、それを良人の氣まぐれ、乃至は過失として片づけたい夫人には、良人が新子を愛してゐると云はれた事は、堪へられないことだつたので、思はずカツとなつて、

「汚はしいことですわ、良人に限つて、他の女性を愛して居るなんてこと、絶對に信じられませ

んわ。」

と、大見得を切つたが、美和子は、それを事ともせず、

「だから、奥さまは何にも御存じないんだわ。御存じなければ、御存じないで、その方が幸福なんだわ。知らなければ、知らないで濟んでしまふんですもの。わざ〳〵こんな所を探して、いらつしやることはないわ。」

あまりの暴言に、夫人は正面からピシヤリと叩かれた思ひで、しばし呆氣に取られて、美和子の顏を、まんじりともせず眺めてゐたが、その洒々とした容子に、また腹が立つて來て、

「まあ、なんて恥知らずの人が揃つてゐるんでせう。私が、こゝへ來て何が惡いんです。私の家庭を破壞しようとする者があれば、その人を面詰するのは、私の權利ですもの。」

今は、皮肉な冷靜な調子はなく呼吸もやゝせはしく取り亂して來た。

「だつて、そりやお姉さんを責めるよりか、前川さんをお責めになる方が、先きだわ。」

と、美和子は、さり氣なく首を振つた。

「だつて、新子さんは、一度私に使はれた人ぢやありませんか、その人が、私の家にゐる間に、主人と怪しい關係をむすんで、私の家を出るとコソ〳〵と、店を出させたことを、私が

だまつて放つて置けますか、貴女のやうな子供には、夫婦間の問題なんて、分らないことですわ。下へ降りてゐて、頂戴！」

夫人は、憤りに煽られて、權柄づくに、さう云つた。

「いやですわ。私が、案内して來た人が、お姉さんを侮辱するのを、だまつて見てゐられないわ。美和子は、決然として屈しない。

「私だつて、故ない侮辱は致しませんよ。」

と、夫人も今は、この小娘侮りがたしと見て、必死だつた。

新子は、もうどうにも出來ない羽目に、追ひ込まれたので、身を棄てゝ、夫人の罵倒に甘んじようとした矢先、思ひがけない美和子の颯爽たる助太刀を、賴もしくは思ひながら、これ以上事を荒立てると、どんな事になるかも知れないので、

「美和ちやん！」

と、低くたしなめた。

すると、美和子は、紅潮した頰を向け、

「お姉さんが、煮え切らないからいけないのよ。だから、愚圖々々いはれるのよ。」

と、姉觸るれば姉を斬る勢

七

（愚圖々々いはれるのよ）

といふ美和子の言葉に、夫人はギョッとして、

「愚圖々々いふとは何ですか。生意氣だわ貴女は。何だつて私をそんなに侮辱するのですか。」

と、今度は自分の方が、被害者でもあるかのやうな夫人の口調である。

美和子は、相變らず、物に動じない圓な瞳をジッと、見はつて、

「だつて、さうなんですもの。前川さんは、穩便主義でお姉さんは、志操堅固なんですもの。愚圖々々いはれる事なんかちつともないわ。お姉さんは、處女ですわ。わたし、處女であることを信じてゐるわ。奥さんに、苛められる事なんか、ちつともないと思ふわ。」

姉に對する美和子の信念は、熱を持つてゐて、さすがに有力な反擊であつた。

だが、夫人も負けてはゐず、

「へえ——。不思議なことを聞くものね。それなら、なほの事、こんなベッドのある部屋で、前

川と會ふことなんか、愼むべきですわ。」

「そんなことは、お姉さんに、おつしやる前に、前川さんに、おつしやるべきだわ。」

「貴女の指圖は受けなくつても、むろん前川を責めますよ。しかしさうする爲にも、このいかゞはしい場所を、確めて置く必要があるぢやありませんか。」

さすがの夫人も、才氣煥發、恐ろしい者知らずの美和子には、やゝ手古ずつてゐる氣味である。

「だつて、確めやうがありますわ、處女であるお姉様に對して、誰と怪しいとか怪しくないとかそんな確めやうなんて、ないと思ふわ。そんな事を、おつしやるのは、却つて貴女の人格を傷つけることになるんだわ。」

と美和子は、もう姉のために辯ずるよりも、いかにもけんだかな增長慢を、歷々と顏に出してゐる夫人に、突つかゝつて行く興奮に自ら醉うてゐるやうに、止めどもなく、喰つてかゝつて行く。

子供らしい彼女の受口の舌の中には、少しは的はづれでも、とにかく相手の何處かを突き刺す毒の針が、無數に含まれてゐる。

新子は、眼を伏せたつきり、問答は全く、夫人と美和子に移つて、彼女は圈外に出された形である。

夫人は、今まで、わが儘一杯に育ち、人を權柄づくにやつつけることには、巧みでも、一度相手から逆擊されて見ると、忽ち勝手が違ひ、カツとのぼせ上つて來、氣の遠くなるほど、美和子が憎らしくなりながら、口の方は却つて辛辣さを無くしてゐた。

「私は、別に埃のない處を叩いてやしません。それが證據に、新子さんは恐れ入つてるぢやありませんか。」

美和子を避けて、弱い姉を衝かうとした。

八

美和子は、また奮然として、

「お姉さんだつて恐れ入つてゐるもんですか。お姉さんは、あんまり良心がありすぎるから、たつた一月お世話になつたことを考へて、遠慮してゐるだけよ。こんなに愼しみぶかいお姉さまを危險視するなんて、大間違ひだわ。お姉さんを、警戒する前に、奥さまは、手近な前川さんの心臟を、しつかりお握りになつてゐるといゝんだわ。」

これは、美和子の揮ふ論理の中でも、相當夫人にとつては、痛いものであるだけに、夫人はま

ますます苛々して、表情らしい表情を無くして了ひ、

「下らない理窟なんか聞きたくないわ。ともかく今夜かぎり、貴女方姉妹は、この店に出入を止して頂きたいわ。ねえ、新子さん、それに異議はないでせう、貴女は先刻承諾した筈ですもの。」

と、敢然として高壓的な態度に出た。

「どんな理由で、止さなければならないんですか。」

と、美和子は落著き拂つて訊いた。

「どんな理由！私が厭なんです。前川がこんな酒場なぞを出すことに、反對するのです。この店が無くなる以上、貴女がこゝに止まるわけはないぢやありませんか。」

夫人は、やう〳〵冷然たる態度を取り戻して來た。

「あら、奥さまは、そんな權利お持ちにならない筈だわ。」

「おや、どうして……良人のものは、私のものですわ。」

「だつて、このお店前川さんのものぢやないわ。」

「ぢや誰のものです。」

夫人は嘲りながら云つた。

「みんな新子姉さんのものよ。」
「美和チャン！」
新子は、思はず美和子を押へようとした。
「お姉さんなぞ、だまつていらつしやい！」
と、云つてまた夫人に向ひ、
「こゝのものは、みんなお姉さんのものだわ。」
夫人は口惜しさうに、ジツと美和子を睨みつめながら、
「だつて、みんな前川が買つたものぢやありませんか。」
「お金は、誰から出てゐるか、私知らないわ。しかし、今では、みんなお姉さんのものだわ。だつて、お店の名義は、お姉さんの名前ですもの、それや、みんな前川さんから貰つたかも知れないわ。でも、貰ひ物は貰つた人のものよ。」
「まあ！圖々しい！」
「圖々しいよりも、こんなこと云ひ合ふの、下品だわ。あさましいわ。だから、お姉さんは、だまつていらつしやるのよ。奥さまが、愚圖々々云へばだまつて出て行くつもりよ。だからお姉さ

んの方が、奥さまや、私よりも人間が上よ。一言も云はないんだもの。」
「ヒドイ！」
夫人は怒りにかすれた喉聲でさう云ふと、いきなり立ち上つた。立ち上つて、扉を押すと、よこつ飛びに階段へ出た。

殉愛の道

一

「美和チャン、貴女…」
「シツ、靜かに。」
と、姉の言葉を押へて、階段口から階下の情勢を窺つたが、動き出した自動車のエンヂンの音を聞くと、
「歸つちやつた！」
と、舌を出した。
「だつて、貴女、ほんとにひどい事云ふんだもの。」

「ひどいつて、どちらが……。あれは、一體何をして生きてゐる人種ですか。苦勞知らずの奥樣で、お金があつて、暇があつて、旦那樣をお尻に敷いて威張つてゐる上に、一寸貧しい同性は、目の敵にして、此方の困ることなんか、おかまひなしに、すぐ出て行けだなんて……人を馬鹿にしてゐるぢやないの、もつと苛めてやればよかつた。あたし、あんなのと喧嘩するの大好きだわ」

美和子が、おどけた口調でいふので、場合を忘れて、新子も一寸ほがらかになりながら、

「だつて、貴女だつて、あの奥樣の立場になれば、きつとあゝだわ。」

「モチ、あたしだつたら、もつと凄くなつちやふ。」

と、艶やかな笑顔をして見せた。

妹の思ひがけない奮闘で、急場の難儀を逃れたことを、嬉しく思ふものゝ、しかし新子の心境はみだれてゐた。

前川が、夫人に對する態度をよく知つて居り、それを改めることが、前川にとつて不可能であると思はれるだけに、夫人に凡てが知られてしまつた現在では、前川と自分との交際も、これが最後であると考へねばならなかつた。

もし、またそれを續けるとしたならば、今以上に、太陽の當らぬ日蔭の地を選ばねばならない

し、またどこに隱れてゐようとも、ゲー・ベー・ウーのやうに鋭い夫人の眼を怖れて、常に恂々としてゐることは、新子の堪へ得る所ではなかつた。

今こそ、前川の周圍から、身を引いて、明るい處へ、新しい生活を築き直すべき機會であると思つた。

新子が、ふかくうなだれて物を思つてゐると、女給のよし子が、不安な表情で上つて來て、小聲で、

「先刻、前川さんがお見えになりましたので、美和子さんのおつしやつた通り、資生堂で待つてゐて頂くやうに、申上げて置きました。」

と、いつた。

「あら、さう。どの位前。」

「たつた今でございます。」

「お姉さま行く？」

と、美和子は姉を見た。一歩、店を出ると、すぐ前川夫人につかまりさうな氣がして、新子は會ひに行く、勇氣が出なかつた。

「ぢや、私、行つて來るわ。とにかく、事件を報告してくるわ。あの人にも少しいつてやるの。」

と、新子が、止める隙もなく、美和子は一散に店を飛び出して行つた。

二

（今取り込みがありますのよ。資生堂で、しばらくお待ちになつてゐて下さいませんか、とおつしやつてゐましたわ。）

と、よし子にいはれて、しかも奥を氣にするその態度に、そは〳〵した不安が感ぜられたので前川は、

（あ。よし！）

と、輕くうなづいて引き返すと、指定された通り、一町とはない資生堂まで歩いて、空いたボツクスを探して、腰をおろすと、アイスクリームを注文した。

取り込みつて、何だらう。姉妹喧嘩でも、始めたのであらうか。それとも、姉から妹に移つたといふ若い音樂家でも、飛び込んで來て、事件でも起したのであらうか、などと今までに例のない事だけに、狐につまゝれたやうな感じのなかにも、新子の身を案ずる不安が漂つてゐた。

だが、十五分とも、待たないうちに、待つてゐた姉の代りに、美和子が入口に現はれ、わざと入口から見えるやうな位置に腰かけてゐる前川を見つけると、思ひの外に元氣のいゝ笑顔で、近づいて來た。

「やア」

と、笑顔で迎へれば、

「のん氣な、顔をしてんのね。」

と、きめつけられて、

「おや、あべこべぢやないですか。そちらこそ、取り込みがあつたといふのに、のん氣な顔をしてゐるぢやありませんか。」

「あら、取り込みなんて、よし子がいつたの？　取り込みなんかぢやないわよ。たゞ、前川さんが、會ひたくない人が來てゐたのよ。」

「ぢや、昔お姉さんの戀人であつた人で、今度貴女と結婚すると云ふ人？」

美和子は、一寸憤つた顔をして、

「自分のお藏に、火がついたのも知らずに、何を云つてんの。私達の戀人ぢやないわよ。貴君の

戀人よ！」

「嘘、おつしやい！」

「嘘なもんですか。前川夫人が乘り込んで來たのよ。」

「僕の女房？　ウソでせう。」

「そら〳〵、直ぐ色を失ふくせに、……嘘なもんですか。」

「綾子が……どうして……」

前川は、きれ〴〵に呟いた。

「何うしてだか、お家へ歸つて奥さんに訊くといゝわ。」

「綾子が、あの家を知つてるわけはないんですよ。冗談にも、そんな事を云ふものぢやありませんよ。」

「そんなに、興奮しないで、落著いて、落著いて！　とにかく、私がどうにか歸したんだから。」

「本當ですか。」

「本當よ。」

癪にさはるほど、美和子は落著き拂つてゐた。

三

「グレープ・ジユース、氷澤山入れてね。」

と、ボーイに命じて、後は前川の張りついたやうな顏に、愛らしく笑ひかけて、

「貴君の奥さんと、やり合つたんで、喉が乾いちやつたの。……でも、不愉快だわ。」

「貴女が、やり合つたんですか。」

前川は、氣の毒なほど、蒼くなつてゐた。

「さうだわ。だつて、新子姉さんは、何にも云はないんだもの。だから、マダム、俄然威張つちやつて、お姉さんを泣かしてしまつたんだ……」

「お店で、ですか。」

「お店で、始まりさうだつたから、二階へ上げちやつたの……」

「二階でね。」

前川は、秘密の核心を衝かれたやうに、憂鬱な顏になつて、

「しかし、こんなに早く何うしてあの店が分つたんでせう。」

「圭子姉さん、御存じ？」

「知つてゐます。」

「あれが、マダムに籠絡されてゐるんだから、世話はないの。私が圭子姉さんに頼まれて、だらしなく案内してしまつたの。」

「圭子姉さんが、ウツカリしてゐた…」

物事の徑路がハツキリして來ると、今までは半信半疑であつた事件が、マザ〳〵と考へられて來、妻の露骨な仕打ちが、わが事のやうに羞らはれて來た。

「奥さんも、隨分思ひ切つた事なさるわねぇ。たとひ、お姉さんを疑つて、いらしつても、いきなり彼處へ來て、直接行動を取るなんて、ひどいわねぇ。」

「ひどい――とんでもない事をする。」

前川は、憮然としてゐた。

「前川さんも、いけないのよ。奥さん一人を、操縦出來ないくせに、私のお姉さんを、どうかしようつて、ムリよ。」

前川は、この小娘と思ひながらも、返すべき言葉がなかつた。

「それに、お姉さんを、心では二つちも三つちもないほど、好きんなつてゐながら、いつまでも穩便主義でやらうなんて、ムリだわ。ムリといふよりも、意氣地がないわ。四十男の感傷主義なんていやだわ。女學生の作文のやうな戀愛なんか、いやだわ。そんな中途半端だから、お姉さんも苦しみ、貴君も苦しむのよ。やるのなら、ハツキリした方がいゝわ。」

「はゝゝゝゝ。」

前川も、つい苦笑してしまつた。しかし笑ひながらも（負うた子に、淺瀨を敎へられ）と、いふいろはだとへを思ひ出してゐた。

「ぢや、あたし行つてお姉さんを代りによこすわ。よく慰めてあげて頂戴ね。お姉さん、隨分考へ込んでゐるわよ。」

と、いふとスラリと立ち上つて、早くも入口の方へ、二、三間歩み去つてゐた。

四

風のやうに、美和子が去つてしまふと、前川は、暫らく味氣なささうに、煙草を吸ひつゞけた。世の常の良人ならば、かゝる場合には、たまりかねて、飛び出して來た自分の妻の心根にもか

なり同情するのであらうが、同棲して以來、十幾年、常に夫人の高慢な意地の惡さに、惱まされる前川は、夫人の人格的な缺點を、洗ひざらひ見せられたやうに、眼の前が暗くなり、妻に對して、落莫たる味氣なさを感ずるばかりであつた。

五分、十分、新子の來るのが、何故か手間どつた。新子が、どんなに、厭がつてゐるだらうと云ふことが、分つてゐるだけに、氣が氣でなかつた。

重ねて、何か注文する氣にもなれず、卓の上の一輪ざしの、名も知らぬ西洋草花をじつと見てゐた。

「お待せ致しました。」

ハツとして、顏を上げると、急いで化粧したらしく、亂れのないいつもの新子が、それでもやさしく微笑しながら立つてゐた。

「すみませんでした。」

前川は、まじ〳〵しながら、頭を下げてあやまつた。

新子は、唇のあたりに、ちよつと悲しい影を漂はせて、しかし眼は前川の氣を、引き立てるやうに笑ひながら、微に首を振つて、席に著いた。

「ほんとうに、申譯ありません。かんにんして下さい。」

と、重ねて、詫び入りながら前川は、にはかに胸の內に、明るいものが、さし上つて來るのを感じた。

（結局、俺の生活には、この人が一番、大事なのだ。この人をさへ失はなければ……何物をも犧牲にして、この人を失はないことが大事なのだ……。人生の方針を、さう訂正することが正しいのだ……）

と　彼は思つた。

家へ歸つて、夫人にどう云はれようが、夫人がどんな行動に出ようとも！

曲者の夫人は、かうなれば……前川の愛が、自分にないことを知れば知るほど、たゞ夫婦と云ふ立場だけを、振り廻して、向つて來るに違ひなかつた。しかし、夫人があらゆる謀計を逞しうしても、もう前川は、二足三足昇りかけた殉愛の階段を、降りる氣はなかつた。いな、たとひその階段が、地獄への下りになつてゐようとも。

「僕どんな償ひでも致します。だから、妻の云つたことなど忘れて下さい。」

と、云ふと新子は、首を振つて、

「いゝえ。」

と、打ち消した。

「どうして？」

前川は、憂鬱さうに、顏を曇らせて訊ねた。

新子は、せかずにゆつくりと、自分の氣持を前川に傳へたかつた。しかし、さうするには、こはあまりに、人目が多すぎた。

五

新子が、何か云ひためらつて居り、それがまた周圍のせゐだと思ふと、前川は、

「兎も角、此處を出ませうか。」

と、云つた。

新子が、機械的に領いてしまつたので、前川は重ねて、

「何處か、靜な家で食事でもしながら、お話ししませう。」

と、云つた。

新子は、素直に立ち上つて、外へ出ると、レジスターへ行つた前川を、凉しい夜風に、吹かれながら待つてゐた。

「どこへ行きませうか。」

と、訊ねる前川に、

「あちらへ！」

と、築地の方向を指すと、一、二間先きに立つて、電車通を渡つた。向ふ側の横町なら、人目も少いし、萬が一にも綾子夫人に、見られる氣づかひはないと思つたのであらう。

出雲橋を渡つて、人通りが少くなると、新子は歩調をゆるめながら、

「私、奥さまに、家庭破壞者だつて、いはれたのが、一番悲しうございましたわ。」

と、いひ出した。

前川は、だまつて聞いてゐた。

「外國の芝居なんか讀んで、（汝！家庭破壞者よ！）なんて、夫人に追ひ出される女なんて、どんなに嫌だらうと思つてゐましたのに、私自身いはれてしまつたんですもの。まるで、錦の御旗をつきつけられた賊軍のやうでしたわ。私、どんな清純な氣持でゐても、奥さまの立場から見れ

ば、さうに違ひないんですもの。やはり、奥さまのおありになる方には、どんな意味でも、お世話にならない方が、いゝんですわ。」

前川は、新子に云はせるだけ、云はせた方が、却つて彼女の胸が晴れるだらうと思つて、なほ默然として歩いてゐた。

「これ以上、お世話になつてゐても、年中ビク〳〵してゐなければなりませんし……それに、美和子が奥さまに、隨分失禮な事を申し上げたので、奥さまは、私達姉妹をもう、仇敵のやうに思つていらつしやるでせうし……」

悲しげに聲が曇り、新子も暫くだまつて歩いてゐたが、

「お世話になるばかりなつてしまつて、勝手な事申上げてゐるやうで、悲しいんですけれど……」

と、新子は前川が、默々と此方の云ひ分を聞いてゐるだけなので、却つて胸が一杯になり、その先を續けて云ふことが出來なくなつた。

何時か、廣い昭和通の歩道を、左へ〳〵と歩いてゐた。

「それに、私ばかりでなく、姉や妹までが、御迷惑ばかりかけてゐるやうで、いやになつてしまひましたの……」

六

人の往來は少く、たゞ自動車の激しく走り過ぎる廣い通に添うて、何處までも歩きながら、前川の沈默は、無氣味な位續いた。

ふとした出來心だとか、物の拍子で、新子に「酒場」を出させたのではなかつた。

新子に會つてゐさへすれば、何といふ事なしに心豐かに、新しい希望の湧き立つやうな、喜悅を感じるからだ。

しかし、前川は穩健主義の紳士で、周圍を毀ち破つてまで、新子との交情を深める考へはなかつた。

綾子夫人の眼から、そつとかくれて、靜かな、足るを知る幸福に甘んじて暮して行かうと思つてゐたのに、綾子夫人はかうした、愼しく隱されたる花園にまで、踏み入つて來て、新子をそこから追ひ出さうとしてゐるのである。

新子が感じてゐるやうに、この關係は不自然に違ひない、しかしそれかと云つて、新子との交渉を絶つてしまふ位なら、自分の位置や名譽はおろか、自分自身さへ、何か要らない無用のもの

のやうに、感じられて來る前川だつた。

（お別れした方がいゝ）

と云つてゐる新子にも、何となくそぐはない一時的の感情が、動いてゐる氣がしてならない。自分の態度が徹底してゐないために、結局新子も、いゝ加減なところで、フラ〳〵してゐるといふ感じであつた。

前川は、歩きながら、つく〴〵考へた。新子のやうな性格的にも上品な、一人の處女を獲るためには、自分の家庭や位置や名譽までも犧牲にする覺悟が必要なのだ。及び腰で、手をさし延べてゐるやうな、自分の態度のために、却つていろ〳〵な事件が起つて來るのかも知れない。

さう考へて來ると、ジワ〳〵とねばり靱い昂揚が、心の中に盛り上つて來た。

「僕は、決心しました。妻が穩便ぢやないんですから、僕も平和第一、安全第一の常識を棄てることにします。」

彼は、靜かにいつた。

「え？」

と、新子は、びつくりしたやうに、眼を見開いて、相手の横顔を見た。

「僕は、貴女を失ひたくない！何物に比べても貴女が大事だ！」

「だつて……」

と、打ち消さうとしたが、新子は顔を赤らめて、うつ向いてしまつた。

「迷惑だとおつしやるんですか。」

前川は、勢旺に訊ねた。

「まあ、迷惑だなんて、そんな事をおつしやるのなら、私このまゝ何處かへ身をかくしてしまひますわ。先刻から、そんな氣持で、申し上げて居るのではありませんのに……たゞ、奥さまにだつて、わるいし、……お子さま達にだつて……」

「そんな事を貴女に考へさせてゐたのは、僕が卑怯だからなんだ、今後、どんな事が起つて來ても、僕の事で貴女に御迷惑はかけない事にします。僕は、その決心をしました。」

相手の激しさに、新子はいよ〳〵うなだれるばかりであつた。

七

「さあ。もう考へないで下さい。」

と、前川は明るく云ひながら、我とわが心に、

（何うしたつて、この人と離れるものか。どんな事があつても頑張る、どんな手段でも取る！）

と、云ひつゞけた。

主客轉倒で、今度は新子がだまりこんでしまつた。

前川は、ふと空を見上げた。

昨夜が中秋であつたと云ふ月夜空、雲がぐん〳〵と動いてゐた。

「だつて、何うなさるんですの。」

やはらかく、新子が訊き返した。

「僕は、貴女が好きだ　絶對に別れない。今までは、僕が卑怯だつたので、貴女に心配をさせた。これから、周圍の如何なる非難も受ける。妻とも戰ひます。だから、貴女は、僕の身の上について、心配することは、一切拔きにして、僕に對する一番素直な氣持にだけなつて下さればいゝんです。」

直ぐには　返事が出來なかつた。

「それ〳〵、そんなに考へないで下さい。考へれば、どうしたつて、餘計な思案が入つて來ます

よ。」

「それでいゝのでせうか。」

新子の聲が弱々しくかすれた。

「いゝどころぢやない。僕達が別れたくない爲には、さうしなければならない。理性にだけつけば、僕達は輕井澤で、もう別れて路傍の人になつてゐますよ。あんな酒場なんか出さないし、今度の事件なんか起らないんですよ。理性と感情と中途半端だから、ゴタ〳〵するんですよ。僕は、今度は貴女を失ひたくないといふ自分の感情本位で行動しますよ。」

「私だつて、感情だけで行動出來たら、どんなに幸福だらうかと思ひますの・・・・、美和子のやうに・・・・」

「うむ。」

と、前川は深くうなづくと、忽ち自分の目頭がうるむのを覺え、新子が限りなく、いぢらしくなり、ギュッと抱きしめて、顏中に唇の雨を降らせたい激しい衝動を感じるのを、息を呑み込んで、ズン〳〵歩きつゞけることで、やつと押へた。

京橋の十字路も、いつか越してゐた。

「お腹すかない？」

「何だか分りませんの。胸が一杯で御飯頂けるかしら・・・・」

「隨分歩いたから、兎も角落著きませう。」

と、その通の路次を、少しはひつた、大きい日本作りの鳥料理の店を、ステツキの先で示しながら、

「あの家靜かですから・・・・」

新子はその先を見やりもせず、

「でも、其處まで行つてしまふの、なか〳〵勇氣が入りますわねえ。」

「よろしい。今迄は、僕がいけなかつた。僕も勇氣を出す、そして貴女にも勇氣を出して貰ふやうにする。それでやつて見て、もし日本が、住みにくかつたら、一緒に三、四年外國へ行つてゐようぢやありませんか。」

と、前川は獅子の如く勇敢に、料理屋の門をはひつて、玄關へつゞく砂利の小徑を、新子のかぼそい身體を、抱くやうにしながら、グン〳〵歩いて行つた。（完）

昭和十年二月九日印刷
昭和十年二月十三日發行
【貞操問答】
定價壹圓五拾錢
著者　菊池寛
發行者　山本三生　東京市芝區新橋七丁目十二
印刷者　君島潔　東京市小石川區久堅町一〇八
（兩角製本）
發兌　改造社　東京市芝區新橋七丁目十二
振替口座東京八四〇二番
電話芝（自一一二一番 至一一二四番）
（共同印刷株式會社印刷）

版權所有

菊池寛著

【改造文庫】

無名作家の日記（他廿三篇）（短篇小説・現代物）定價五十錢送料四十錢
出世（他廿七篇）（短篇小説・現代物）定價四十錢送料四十錢
恩讐の彼方に（他廿八篇）（短篇小説・時代物）定價五十錢送料四十錢
噂の發生（他廿六篇）（短篇小説・補遺）定價四十錢送料四十錢
父歸る（他廿三篇）（戯曲・現代物）定價五十錢送料五十錢
藤十郎の戀（他十九篇）（戯曲・時代物）定價五十錢送料五十錢
眞珠夫人　定價六十錢送料十二錢
慈悲心鳥　定價四十錢送料八錢
新珠　定價五十錢送料十錢
火華　定價四十錢送料八錢
受難華　定價五十錢送料十錢
赤い白鳥　定價三十錢送料六錢
明眸禍　定價五十錢送料十錢
新女性鑑　定價三十錢送料六錢
陸の人魚　定價四十錢送料八錢
第二の接吻　定價三十錢送料六錢
東京行進曲　定價三十錢送料六錢
結婚二重奏　定價三十錢送料六錢
不壞の白珠　定價三十錢送料六錢

菊池寛全集（日本文學大全集）

四六倍判上製
定價二圓五十錢
送料二十二錢

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black